

## 口頭伝承

### はじめに

九月二十六日の妙義町民俗調査報告会の時、昔話のしまいのことはとして、(うち中の人の名前をいって)「○人でな、市がさかかってきてのんだ、うまいものをいっばいかってきて、酒のんだって」(山下)という報告があったが、今手元には、かんじんの昔話は、ほとんど集っていない。しまいのことはだけを残して、消えてしまったとも思われないが。

伝説は、お菊さま・白ひげ様・一山和尚・瓜引き地蔵などを始めて多く集った。

世間話の中にある「へつぱり関」の話は、「松井田町の民俗——坂本・入山地区——」(群馬県民俗調査報告書第九集 188ページ)の「へつぱり関さん」と同一人物の話である。

灘田のなべつるで、昭和十六年に、七十八、九で死んだ関さんは、へつぱりの名人であった。本職は、左官。いなかの大関、あるいは関取りという意味で、こう呼んだらしい。チヨンマゲをつけていて、ふきを売り歩くこともあった。いよいよ尻をするのになると、必ず用たしに行った。帰って来ると、四つばいになるように身構えて、いろいろ尻をひり分けた。低音、高音はもちろん、鶯の谷渡り、はしごつべ、数々の曲芸があった。店に行つて、かけをして、みごと百八の尻をしたが、おまけをしたのでかけに負けた、という話もある。

関さんは、山へ行つてはしごにする木を見たるところから尻を始め鋸で切り倒すところの尻、木を二つにさくところ、十三段に組み立てるところという様に、説明をしながら尻をひり分けたという。よその国の名人と尻比べをしても負けたことがなかったとも伝えている。(灘田)

十六年たつての再登場は興味があるので、再録した。

「百姓仕事 百姓は計算して、損だ損だというのが、働かなければもつと損だ」(上高田)「嘘で通らねえのは百姓だけだ」という諺に教えられた。

「鯨が鯛に追われるんが一番こわい」(菅原)というのは、食い物に追われる生活のきびしさを示すが、この諺が心に残った。この諺は、手元にある、どの諺の辞典にも見当たらない。鯛はともかく、一生鯨を見ることもない土地の、どこからこの諺は生れたのだろうか。(上野勇)

### 一、昔話

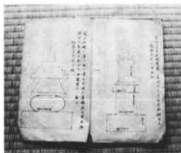
ほととぎす「おと、のど、つつきつた」と鳴く。弟がのどを、つつ切つたという昔話を聞いたことがある。(菅原)

### 二、伝説

お菊さま 小幡城の奥女に上つた人で、中里の出身、ムラにお菊の



菊女の墓（中里）（撮影 根岸謙之助）



菊女の墓の設計図（中里）  
（撮影 根岸謙之助）

墓がある。お菊は殿様の奥方にねたまれて、蛇にめにあつて死んだ。中里出身なので、亡きがらを引きとつてきて、この地に埋葬した。その後崇りがあったので、小幡氏は五つの法名を贈り霊をとりわたつた。墓の側のお堂には、白い蛇がいた。四月十九日にお祭りした。お菊の墓に願をかけると、願いごとがかなう。石塔を削つて粉を飲むと病気が治る。（中里）

白ひげ様 八木（連）の神さまは白ひげ様で、御神体は蛇だといつた。（上高田）

磨墨と磨墨神社 源頼朝の愛馬（高田小次郎の愛馬ともいう）を祀つた磨墨神社は、大正時代に神社合祀で伏見神社に合祀される前は字馬の宮にあつた。この磨墨は大桁山に生まれた。高田川の近くには嘸といふ地名があるが、これは故郷に戻ろうとした磨墨が、この地で飛ぶ上がつて嘸いた後、死んだことから付けられたもので、高田川にはその土手にかけて磨墨が足をかけたといふ馬蹄形の割れ目をした磨墨石がころがつている。原石は、菅原ダムの下から産出し、水が出た時に下流に流されてきたものである。現在の伏見神社の天井絵は、磨墨神

社の天井絵を解体して復元したものであり、絵は全て馬である。（下高田）

大桁と磨墨 頼朝の名馬だった磨墨は大桁山が生地で、戦いで破れた後、生れ故郷に帰ろうとして戻ってきたが、ついに大桁山まで行きつづけず、高田の嘸といふ場所まで山の方を向いて死んでしまった。嘸といふ地名は今に残つており、名馬の墓は高田にある。大桁山からは水が出ると磨墨石が流れ出し、これを磨くと磨墨のような真黒いつやのある色を出す。（菅原）

お精進場 ここにいい湧水の出る水源地がある。吾妻屋神社へ参詣する人がここで身を清めて拝みに行つたのでこの名がついたそうだ（諸戸）

天狗のお能 妙義へ鉄砲ぶちに行き、タルワキの沢のツメ（奥）の岩ツキで、しゃがんで獲物を持っている時だった。晩方だったがどこか遠い所でお祭のシャギリをやっているような、かすかな音が聞えた。どこだか分らないが、どこか近い所でお祭をやつていて、その音が妙義の岩におつつかつてはねつ返つて聞えたのではないか。白雲・金洞山の間の低い山で白雲分の山だった。今は禁猟区だが昔は入れた所だった。「天狗のお能」「天狗のシャギリ」などこのことではいふ。（諸戸）

蛇 昔は大きな蛇がいた。大桁山へ草刈りに行つたところ、馬がまたいで行つたのをよく見たところ、丸太だと思つたのが直径五寸くらい大きな蛇だった。

大久保の方の桑清水へ行って帰るとき、一升びんほどの太さの蛇がいて、こわくて逃げて来た。（上高田）

一山和尚 江戸時代明和年間に、一山和尚という行者が、不動様をしょつていすころともなく妙義へ来た。白雲山の石倉にいて妙義山を開発して五百羅漢を立てようとした。村人が山へ馬草刈りに行つて出会い、何か食べたい物をいえば、ぼたもちでもまんじゅうでも出してくれた。人々がたまげて、どうも不思議だ、追ひ払えというので、

名主佐藤庄右衛門が追い払った。行者は恨みをもって名主の家の前を通る時、この家を黒土にしてくれとのろって、持っていた錫杖で石橋を突いたら、石に穴があいたという。その後、名主の家は系図が絶えて、神宮家から養子が来て継いだ。行者は江戸へ出て、浅草に五百羅漢を立てたので、そこが繁華街になって栄えたという。彼がしょつていた不動様が随応寺山門にあるという。(日向)

阿弥陀堂という地名の由来 この地に阿弥陀堂があり、釈迦と阿弥陀を祀つてある。無住の寺で、村人が葬儀をする時は、この堂に富岡の永心寺から坊さんが来て説経した。(中里)



瓜びき地藏 (上八木連) (撮影 阪本英一)

現在のところにおまつりした。(八木連)

猿田彦大神 ある家の物置を下十二の人が買つてもつていったところ、物置の神さまがその家の若い衆についでしまつてひどいめにあつたという。屋根を舞い歩つたというが拝む人に見てもらつて、猿田彦大神を信仰してからよくなつた。(上高田)

大久保と菅原 大久保の人は、藤原時平の子孫といわれ、菅原の人は天神さまの氏子なので仲が悪いので大久保と菅原は縁組をしてはいけないといわれて来た。(八木連子大久保)

オジガ様 天神様の叔父さんを祀つたといわれ、高いところに小か

な森があり、三月二十五日と十月二十五日の天神様の祭りにはそこまで獅子をふりにいった。(菅原)

川後石 天神様が、お籠に乗つて来て、休んだので、始めは籠石といつた。天神様には子どもが、二十五人あつた。七歳の童子が鳥流しにあつて、菅原に來た。その足跡が残つている。(菅原)

菅原の上に川後石(カワゴイシ)といふところがある。昔天神様が子供のころ休んだ石で、川を越えた石と書いた。また石の上に籠を置いて休んだのでカワゴイシといつたとも伝えられている。菅原神社のご神体は、道真公が七才のときの少年姿だともいふ。この平たい大きな石の下に、何かあると思つて掘つたことがあるが何もでなかつた。この石を特に祀ることはない。(菅原)

足跡石 菅原神社に、天神様の七歳の時の足跡のある石がある。(菅原)

硯水 妙義に、硯水というところがある。天神様が、その水を使つて勉強した。(菅原)



ムラの井戸 (大久保)

水源は弘法の井戸。ここから桶に汲んだ水が降りた。雪が降るときは、家を運んだ。雪が降りたときなど水汲みの人で、列をなしたという。(撮影 金子緯一郎)

弘法の井戸 昔、弘法大師が大久保に來られた時、村人が水に苦しんで、杖を見て、持つていた杖をついて、井戸のあたりかを教え、こんこんと湧き出した水源に金の独鈷を埋めたところ、どんなひりにも枯れることがない井戸になつたという。そこで村の人は弘法井戸と名づけ、うまい水を金水といふ。井戸は

寒行の時の水ごりにも使用したが、堀を通過して岩井田郎氏方の土蔵の西の石垣下に井戸をつくって引き入れ、さらに現在の中井戸のところと下井戸にひかれた。村中からこの井戸へ水くみに来たが、その役は婦人の仕事で、天びんで水桶を担いだので、中井戸の横木には、天びんをさしたあとが残っている。赤ん坊のいる人は赤子を背負って水くみをしたので、他村の人は「大久保へ嫁に行くか、ハダカでバラを背負うか」といったという。しかし、村中の嫁たちが水くみに来るから、順番を待ちながらの村の社交場になった。だからつまらない時は井戸へ行けば話し相手があった。しかし、女性は月のものがある時は中井戸を使わなかったという。

昭和二十六年にこの近辺で一番早く水道をつくったが、水源は弘法井戸を使い、基井戸とした。その時水源を掘ってみたところ、石櫃が埋められ、その中に独結が納められていた。金ではなかったがいろいろえ通りだと村の人たちはよるこんで再びもとのように納めたという。いまの中井戸は大正初年に手入れたままという。

中井戸には、横木に釘が打ってあり、そこに村中の名札がつるされ、井水を掃除する当番の札がかけられたといわれ、札のあたった人がきれいに掃除をしたものという。今では各家庭に水道があるので水汲みも、掃除の当番もないが、水はあふれるように流れている。(八木連字 大久保)

大久保は昔から水に苦しんでいた。あるとき弘法大師さまがここへ来られ村人が水に難儀しているのを見て、持つていた杖をついて井戸を示して水を出して、そこに金の独結(とっこ)を埋めたところ、今まで水がなかったところにきれいな水があふれ出したという。そこで村の人はこの水を金水というにした。弘法の井戸ともいう。

昭和二十四年に簡易水道をつくったとき、弘法井戸を基井戸としたが、そのとき水源をたしかめたところ、石櫃の中に入った独結が出て来たので「話の通りだ」と村の人はよろこび、そのまま納めて



弘法池 (大久保) (撮影 阪本英一)

あるという。(八木連字 大久保)

弘法池 弘法井戸に並んで弘法池とか、弁天池とよばれる池がある。

弘法井戸の余り水を入れてあり、村持ちで世話人が管理していた。この水はいくら汲んでもよいが、足を入れて洗ったり、汚れものを洗うとか、中に入ることは禁じられていた。どんなに汲み出しても枯れることはなかった。コイも放してあるが、これをとって食うと目がつぶれるといつた。(八木連字 大久保)

鳴沢不動尊 大桁山には千谷あつ

て、弘法大師がここに高野山をつくらうとしてやって来て谷数を数えたとき、妙義山の天狗がそれは困るというつて一谷かくしてしまった。それで不動さんが怒ったので、それじゃあ何でもなれといつたら「ナルサ」といって鳴沢不動(富岡市上丹生)になったという。(八木連) 大久保のサカサ松 大久保にあった松で、昔弘法さまが松の杖を逆さについたままにしておいたら、根が出て葉が出て逆さの松になったという。(八木連)

片目のどじょう 弘法の池より上の方にいたどじょうは、どういうものか片目のものが多かった。(八木連字 大久保)

弘法池のコイ 弘法池のコイは片目だという。(菅原)

弘法さまに顔をかけた人が、オガシにコイを納めたもの、とって食べれば目がつぶれるといわれた。(八木連字 大久保)

弘法さまと犬 弘法さまが大久保へ来た時は、どこからか犬に追われて来たといわれ、そんなことからこの村では昔は犬を飼わなかった。(八木連字 大久保)

ツキヌキ沢 昔、弘法様が来て、大桁山に千谷あれば高野山を移そうとした。ところが、〇〇ババアが隠したので、千谷わからなかった。弘法様が、たしかに谷があるはずだと杖を突いたら、水が湧き出した。そこがツキヌキ沢で、果でも一、二番の質のいい水が出るので、水道の水源地になっている。(行沢)

昔、弘法様が来て杖を突いたら、いい水が出たという。水が豊富で、以前は水車も回っていた。今は水タンクがあつて高田まで水をひいている。(行沢)

天狗のつくったお道具 弘法様は、大きな寺をつくる土地を探しにこの地へ来られ、大桁山を候補地に考えておられた。寺を建てるにふさわしい山は、谷が千谷ある山といわれ、大桁山は千谷あるというのである。弘法さまが直々に来られる話を聞いて驚いたのは妙義山に長く住んでいる天狗たちで、大桁山は昔からの遊び場だったので、これは大変なことになったというので急いで天狗たちが集まって相談したが、何としても良い案が出ない。しまいに千谷あるからいけないのだから、一谷埋めてしまおうということになり、いよいよ作業にとりかかってみたが、大きな石ばかり出て来て、天狗の仲間に犠牲者が出る始末で作業ははかどらない。これではかなわないというので、再び集まって相談したところ、坊さんは女性を避けるという。それならば女のお道具をつくって谷におけばいいだろう、ということになり、天狗たちは大急ぎで女のお道具を七つくり、山に並べておいたという。それからしばらくして弘法さまがやって来られ、谷数を数え始めたところ、谷の中に大きな女のお道具があるのを見ておどろき、一谷数えなかつたために千谷に足りなくなつてしまつた。それで大桁山は寺を建てる場所としては足らない山としてあきらめて帰られたという。その後千谷あるところとして開かれたのが高野山だつた。よろこんだのは天狗たちで、さつそくお祝いをして、天狗の大將が大きな盃を投げたところが、大桁山の三侯のところの盃石、また子分の天狗のなげ

たの小さい盃石という。なお、天狗のつくった女のお道具は「大桁山のサネ石」といい、いまも三つが残っているという。(八木連字大久保)

山天狗 村のある人が入山川(松井田町)へヤマメとりに行き、がけから落ちて奇跡的に助かつたが、その時、ちゃんとうたをしておいた腰籠が、ふたをしたままになつていながら、中に入つていたヤマメが一びきもいなくなつていたという。山天狗にやられたのだといつていた。(上高田)

男の道具 妙義様のご神体は男の道具という。その分かされは妙義の葦屋のもので、もとは石のきれいなのがあつたが、火事で頭が欠けてしまつて、その後は今の木のものになつた。ゴモツトモサマともいう。もとの石のものは菅原のどこかにあるという。(上高田)

金穴 昔菅原の打越に田村という名主がいた。この人は佐渡から金鉱石を持ってきて、こうゆう石が金鶏山から出るといつて、小幡の殿をだまして掘らせた。そのうそがバレて自分の家の倉の中で腹を切つて死んだ。このような金穴というのが菅原には二カ所ある。下の金穴、上の金穴といい、小幡の殿様から金を引出すために下々の連中が組んでした仕事で金儲けをしそこなつた。(菅原)

鯨泉 村内の川のところに一軒の鯨泉宿があつた。子供のきものによく効いたので瓶に汲んできたりした。一日五銭位で、村の若衆の遊び場であつたが、明治四十三年の大水で鯨泉が出なくなり、鯨泉宿もなくなつた。(菅原)

正法寺の松 昔は正法寺の裏山・龍池山に大きな松があつた。熊谷からよく見えた。(八木連字大久保)

古立の由来 古立は古館で、景行天皇の御代に、坂上田村麿が来て、ヤカトを築いたところでタテ(館)と言う。ムラには田村姓が多く二十八軒もある。本家(田村秀一宅)には当時からの系図がある。(古立) 蟹沢 妙義町大字中里蟹沢という地名の由来。沢に蟹がたくさん

いて、とって食べると、真水にいろにもかかわらず、塩っぱい味がした。炒ると色がまっかになった。(中里)

行人坂 行人様がいたといい、石宮があるが、伝説はない。(行沢)  
行人塚 爪引き地蔵の前にある法印の碑は、昔、あるときここへ来た法印が、ここへ生きたまま埋めてもらい、カネの音がしなくなったら往生したと思え、といてこもって入定した所という。(八木連)  
コツカさま 昔の塚で、戦争した人の骨を納めたものといひ、三月三日がお祭りときられていた。コツカさまは宝物があつたという。(八木連)

べんけいばし 弁慶が妙義から、石をかついで来たという橋が西横野にある。(菅原)

二ツ岩 高田川に深い淵があり、一ツ岩、二ツ岩という。二ツ岩から鳥居を流したら小坂(下仁田町)のクモが淵に浮いたという。また、ニワトリを向こうから流したら、三日めにこつちに浮いたともいう。深い所で、子供がぐずって泣くと「わからずの子は二ツ岩に流すぞ」といっておどした。(行沢)

### 三、世間話・怪異

世間話 松井田町の入山の出身の関某のことを世間では「へつぱり関」と呼び、屁の名人といわれた。屁を思いのままに、ひり分けられることが出来る人だった。

はしごつ尻 音を長くして、ところどころに、オヤギを入れる(区切り)ひり方。

かいだん屁

あさまの噴火

うぐいすの谷渡りなどがあつた。

ちよんまげを結い、尺八をする人だった。(妙義)

巾着はざり 昔菅原の打越に、頭のいい名主がいて、佐渡から、金の鉱石を持って来て、金鶏山という名の通り、こういう石が出るといつて、小幡の殿様に嘆願した。そして掘ることを許すといつたので掘り始めた。そうしちやまた佐渡から鉱石を持って来て、金の石が出たといつて、小幡の殿様をだまぐらかしたので、巾着はざりという。今その穴が、ずつと深い井戸のように下におられる。下の方に水がたまっている。結局それが判つて、自分のうちの倉で腹を切つて死んだ。その倉が今でもある。(菅原)

菅原の山男 T・Hさんは、夜昼わらじをぬがない。豆腐を手のひらに乗せて食べる。食つて寝ているだけで、仕事はしない。女に手を出さない。おつかながられない。(菅原)

馬子 東海道の話というが、昔、目の治療に行くといふ殿さまを馬に乗せたところが、馬子の衣裳を見て殿さまが「夏冬が、一緒に来たか、これ馬子や、一重のともあれば、二重のともある」といってさわがしたとき、馬子はあわてずに「夜昼が一緒に来たか、旦那さま、起きている目もある、寝ている目もある」と答えたという。この馬子は後に大へん出世したという。(八木連)

力持ち 昔の人だが村のある人は、米俵を二俵背負つてこま下駄で小作米を納めに来たという。その人は二十貫ばかりを自分の手でつるして俵の重さをはかったという。(上高田)

火の玉 夕方妹と遊んでいる時、火の玉がふわつと飛んでお寺の方へ行くのを見た。妹と一語に見たが、その時死んだ人がいた。(日向)

不思議な話 一昨年、お茶摘みから帰つて来たら、もう夕方だったがおいでして行くと白いシャツを着た子供が五人も六人もいて、おいでと氣をつけて早く帰つて来たので何事もなかつた。これも化かされた話になるのかなと思つた。(上高田下十二)

化かされた話、中里の藤重さんが、青木の墓でけものに化かされて、

墓場の垣根に首を突っこんで「お頼み申します」といつて頼んでいたという。(上高田)

お寺へ行ってお花を習っている時、仏壇でジュズが落ちたような音がした。皆でその方を見た人が立っついて、すぐに消えた。居合せた七人がみんなで見えた本当の話である。あとで聞くとその人が死んだ時刻だった。(諸戸字日向)

狐 水車小屋で仕事をしていると、提灯のろうそくの火がバツと消えたので、つけようと思つて見たら、予備のろうそくも失くなつていた。狐のしわざかという。(諸戸字木戸・久保)

南蛇井 吉田村に南蛇井(現富岡市)というところがある。ある人がきて、「みなみへびむらとはなんじやい」といつたら、そのことを聞かれた人が、「そうです」といつた。そしたら、聞いた人が、「おらあ、わざわざ聞くの、そんなほう(答え方)があるかい」とおこつたつて。(上高田佐藤製袋吉氏談)

岩根先生 ある小学校に岩根先生という先生が赴任してきた。子どもが、「先生、なんちゅう名だい」と聞いた。先生は、「いわね」といつたら、子どもは、「いわなけりやいいやい」といつておこつたつて。(上高田)

#### 四、諺・談

##### (一) 談

百姓仕事 百姓は計算して、損だ損だというのが、働かなければもつと損だ。(上高田)

嘘で通らねえのは百姓だけだ。百姓くらいまじめな仕事はない。種をまいたつていつて、まかなきや出ない。肥料をやつたつていつて、やらなきや収穫はない。(菅原)

鯨が鱈に追われるんが一番こわい。鱈は鯨の餌だ。その餌に追われるというのは、百姓は食べ物足りなくなるのが、一番こわいということだ。(菅原)

「烟の手入れて、回りごせいは半分仕事がすむ」という。烟の回りをていねいに作れば仕事の半分は済んだよなものだという意味である。又、「烟の手入れは回りからしろ」ともいう。

「いるところくぼむ」といい、人が多勢集つたところが消費が多く損をする。

「居候、置いてあわず居てあわず」と同じこと。(中里字北山・菅原)

「米一升、粉一升たやすな」といい、常にこれだけは備えて置けといつた。(中里字北山・菅原)

人の氣 「百日のひでりもいま一日」ということばがある。どんなことにもいろいろの立場の人がいるということである。(上高田)

ゴゼノシヨンベン うすい茶のこと。ゴゼは喉をうたうので、よくお茶を飲む。出がらしになつて、薄い水ばかりのような茶を飲むゴゼの小便は薄いという意味である。(古立)

流れ川に(を)棒で打つ 流れ川を棒で打つても、びしゃんという、なくなつてしまふ。やりつばなし。(菅原)

娘の見置きと草の見置きはするな。(上高田)

中野谷へ嫁に行くか、はだかでバラをしようか。(大蚕をする所なので仕事がきつい)(諸戸字日向)

コヌカ三合あれば、婿に行くな。(諸戸字日向)

「木と女はわれないものはない」「女と斬は割れないものはない。」

「木元、竹うら、裸かつぱ。」「おおがみ様より、むりどんがこわい。」(古立)

高田の中、米の中。

千駄のこやし、一夜のしん。

ハマクリ半石（はまくりの虫がつくと半毛になる意）（下高田）  
中之岳の三束雨 中之岳からくる夕立はミアシ（三步）で来るので  
用意する間もないほどである。しかし、近年はあまり来なくなつてい  
る。（上高田）

「上州の燗天下に屋根の石」と言つた。（古立）  
上州名物ごぞんじないか、かかあでんかに、屋根の石。（下高田）

## (一) 謎

なぞ なぞなぞ遊びの始めには、なんきりぼうちよう、きりぼうちよ  
うといつた。

なぞの解けない時は、もんじといつた。（菅原）

## 五、命名・方言

### (一) 命名

ヤツ 地形名。谷状になつてはじめしているようなところ。この  
あたりでヤツ（谷津）と呼ばれるところはお寺ヤツ、稲荷ヤツ・うし  
ろヤツ・コロンザワヤツ・トウカヤツ（オトウカがすんでいたという）・  
モジナヤツ（二〜三年まえまでムジナがすんでいた）・明戸ヤツ・四日  
ヤツ・コシガヤツなどがある。（下高田字新光寺）

地名 八升まき、山の下、てっぺん、ししこや、おんだし、天沢（あ  
ま沢）（北山菅原）

オネ 地形名。尾根状につづいている高いところ。このあたりでは  
中オネがある。十日ヤツとコロンザワヤツの間である。（下高田字新光  
寺）

ママ 耕作地の土手をいう。（下高田字新光寺）

ツルマキ 旧高田川ぞいの段崖の下の湿地で、洪水でおしながされ

たりしたこともあるところ。（下高田字新光寺）

オシダシ 山がクエテおしだしたところ。（下高田字新光寺）

妙義の七ゲート 宮ゲート・豆ゲート・西ゲート・平ゲート・高ゲ  
ト・小屋ゲートなど、ゲート（谷戸）の地名がある。（諸戸字日向）

苗字 北山菅原の苗字は、岡田・中山・清水・島田・森木・俣田。  
（中里字北山・菅原）

風名 ツムジ風は春先吹く。ツナミ風は北東から吹く。ニシカゼは

妙義方向から吹く。（下高田字本村）

星名 サンジヨウホシはオリオンの三つ星。ヒシヤクホシは北斗七

星。ヒグレニユウドウサマは宵の明星。チカボシは月のこくそばに出

る星で、あんまり月に近づくと人が死ぬといふ。（下高田字本村）

### (二) 方言

ヤットコセー せみの幼虫。（下高田字本村）

ヒイログチ 草木の芽がはじめた時、蛭の口のように見える。（菅  
原）

カマイタチ ツムジ風が巻いてごみを持ち上げて吹くと、足が鎌の

形に切れることがある。カマイタチという。（諸戸字日影）

ヒネジイサン 曾祖父。（菅原）

バカ水 川の水が急に出て来ることをバカ水とか、テッポウ水と呼  
んでいた。（古立）

カラツケリ たわらつばき。

アタマノミゾオチ ひよめき。

ドオツバナ 青つばな。

ミチワスレグサ ひがんばな。葉は熱を出すので、さつまの苗間に  
いい。

カマクラチヨウ あげは蝶。（菅原）

ヤキモチヤキ 沢庵などの漬けものを切った時、よく切れずに、つ



ながっているもの。(菅原)

シキセ つぎを当てること

ナルイ 坂がなるいなど、ゆるやかなの意。

油タクネ 油の無駄づかい。(諸戸字日影)

トクセエ 沢山あること。

ミヨリガエシ 原価の三倍に売ること。

クマン くまん蜂。

ブンゾウ豆 さやえんどう。

トウジソボ 物乞いする人。

カンジン 物乞いする人。

チュウド その頃。(行沢)

ムツムツスル むし暑い。

ラチガアイタ はかどった。

コマワリ 割り当て仕事。その仕事がすめば遊んでいい。

オマンゴト ままごと。

オ客ツコ お客様ごっこ。

メタメタ どんどん。

トクセエ 大変多い。

コトコスル ことをする。

ムシシ (昔は語尾につけた。)

昔はこでもムシ(ね)と同義語)ということばを使っていた。(諸

戸字日向)

挨拶 朝、お早ようございます。昼、今日は。夕、おつかれでござ

います。雨、いいおしめりだのう。弱ったおしめりだのう。大降りで

したな。風、うんと荒れたのう。えらい荒れだつたのう。盆、おさむ

しゅうございます。死亡、とんだおまちがいでして。御愁傷様です。

年始、あけましておめでとうございます。今年もよろしく願ひしま

す。(菅原)

日常のあいさつ

朝 お早ようございます。

年よりは「お早ようがんす」「おはようさん」

昼 十時すぎごろから「今日は」「コンチハ」

夕 お疲れます。「お晩です」は少い。

夜 今晩は。(上高田字上十二)

天候による挨拶

晴れの日 「いいお天気です」「いい天気が続くのう」

曇りの日 「しょうがねえ天気です」「降っちゃあ困るのう」

雨の日 「今日は大降りです」「降ってよかつたね」

風の日 「悪い風だのう」「よく吹くのう」

農作業中 「できぐあいはどうだね」(上高田字上十二)

祝い事の挨拶

結納 「今日は」で家の中へ入り、座敷で「こちらでは結納でおめ

でとうございます」という。

結婚式 「本日は吉日でおめでとうございます」「こちらで

出産 「よくお軽くなつたようでおめでとうございます」「こちらで

はおにぎやかになつておめでとうございます」。(上高田字上

十二)

不幸のときの挨拶

お悔み(弔問) 組の人何人かそろって行き、一人が口を開いて「お

聞き申せば〇さんがなくなつたさうで御愁傷さまです」と

いつてみんなで頭を下げる。

お悔み(翌日) 「ますます御愁傷さまです」

葬式の日 「御出棺につきます御愁傷さまです」

初七日 「今日はヒト七日でおさびしゅうございます」

七七供養(五七供養) 「今日は四十九日(三十五日)で、こていね

いな御供養をいただきますして御愁傷さまです」

新盆

「新盆で思い出して御愁傷さまです」昔の年よりは「新盆で

火事、交通事故

「とんだ御災難で：」

近火見舞

「ご近所の御災難で：」

あとの方ははつきりいわないという。(上高田字上十二)

呼びかけ

夫から妻へ

オイ

妻から夫へ

トウチャン オトウチャン

父から子へ

名前を呼ぶ

母から子へ

同

子から父へ

チャン、オトツツアン

子から母へ

カアヤン、オツカサン

家族から祖父母へ

オジイサン、オバアサン

祖父母から家族へ

名前を呼ぶ。(上高田字上十二)

呼称

祖父

オジイサン

祖母

オバアサン

父

トウチャン

オトツツアン

母

オツカサン

兄

アニイ アニキ

姉

アネエ アネゴ

弟

名前をよびつけ

妹

名前をよびつけ(上高田)

鳥の鳴き声

ヒトトは「セツク、セチマニ、モチツイテ、ピイツチ

ヤ」と鳴くといった。畏で取れた。(古立)

# 妙義町の民家

## はじめに

この調査は、次のような四段階に分けておこなわれた。第一段階は、老人クラブの皆さんのお世話になって、古い家、明治末年頃までに建てられた比較的新しい家でも特徴のある家、あまりよくわからないがこの際ぜひみてもらってほしいと思われる家などを、町内すべての地区からとりあげていただいた。その結果、町内全域から七十二棟の民家が、町教委事務局に報告され、リストアップされた。

第二段階は、リストアップされた七十二棟の民家を、一日で下見調査をできる量(約三十棟)に絞る作業であった。これは町教委事務局でおこなった。

第三段階は、第二段階で三十棟に絞られた民家を、筆者が一軒ずつ順次訪問し、外観・土間・大黒柱などを直接見せていただくと同時に、遺構の建造年代等の簡単な聞き取りも行ない、最終調査の対象となる民家を筆者自身が選定することであった。これは一般に下見調査といい、表1に示した三十一棟について、下見をおこなった。

下見調査は、昭和五十七年七月九日町教委の島田保氏・石井清和氏のご案内で実施した。なお、下見調査の対象となった民家所有者には、事前連絡もなく突然訪れたにもかかわらず、好意的に迎えていただいたばかりでなく、親切に家歴等を語ってくれた人達が多かった。ここに表1の民家所有者に対して、心から厚く

表1-1 地域別下見調査対象民家

地区名	民家所有者名(敬称略)	棟数
中里	藤井 侃	1
古立	田村 武	1
行沢	秋山 恵助	1
普原	須貝佳孝・石井直人・中山浅男・竹田幸義・掛川満弥 中沢治年・清水敏男	7
諸戸	佐藤 博・市川辰広・関 重一	3
妙義	佐藤 公・岡部高喜	2
大牛	佐藤新太郎	1
上高田	清水正久・清水和夫・佐藤一志・高橋泰弘	4
下高田	赤尾 勉・赤尾博明・佐藤好風・山田 弘・広木 勇	8
八木連	矢島寿明・矢島一男・藤井照治 岩井祐平・岩井蓮治・小島敏康	3
総合棟数		31

お礼申し上げる次第である。

下見調査の結果、十一棟の最終調査民家を選定した。最終調査は、対象となった十一棟の民家の現状平面図・痕跡図・復原平面図・復原断面図を採取し、遺構内外の写真を撮り、遺構の建造年代や家歴等についての聞き取りなどを実施した。

なお、最終調査に際しては、上毛歴史建築研究所研究員田島豊穂氏に、断面図の採取を協力していただき、藤岡工業高校教諭池田修氏には、計測のご協力をいただいたので、ここに記して厚くお礼申し上げます。

たい。

また、最終調査の対称となった十一棟の民家所有者には、ご多忙中にもかかわらず、家の隅々まで開放し、心良く見せていただいたことに對して、まことに頭の下る思いであった。ここに衷心より感謝の意を表する次第である。(桑原 稔)

## 一、調査民家の分類

### (一) 間取からみた分類

最終調査を実施した十一棟の民家を、復原平面（建造当初の間取）から分類すると、次のようである。

- ① 三間取の民家→「広間型の民家」と仮称す。
  - ② 喰違四間取の民家
  - ③ 四室より間取の多い民家→「多間取の民家」と仮称す。
- 以上の三つの平面形式に属する最終調査民家をあげると、表1-2のようである。

### (二) 職業からみた分類

最終調査民家十一棟を、江戸時代の職業から分類すると、次のようである。

- ① 農業
  - ② 武士
  - ③ 商業
- 農業を当時の役職等によって、さらに分類すると、一般農民（本百姓）と考えられる家五戸、組頭一戸、名主三戸である。これらを整理すると表1-3のようである。

表一-3 職業別の最終調査民家

職業	農業			職名	棟数
	名主	組頭	本百姓		
武士	掛川満弥家			最終調査民家	
商業	岡部高喜家				
		竹田幸義家・中山浅男家・岩井祐平家	佐藤好風家	矢島一男家・佐藤博家・須貝佳孝家 岩井謹治家・藤井侃家	5
					3
					1
					1

表一-2 平面形式別最終調査民家

平面形式名	最終調査民家	棟数
広間型	矢島一男家・竹田幸義家・掛川満弥家	3
喰違四間取	中山浅男家・佐藤博家・須貝佳孝家 岩井謹治家・岡部高喜家	5
多間取	岩井祐平家・佐藤好風家・藤井侃家	3
総合計棟数		11

## 二、編年の指標

十一棟の最終調査民家のうち、裏付けのある伝承などにより、建造年代を明らかにできたものは、岩井謹治家・岩井祐平家・佐藤好風家・藤井侃家・岡部高喜家の五棟（約四五％）であった。また、この他に裏付けをとれなかったものの、伝承によって建造年代をほぼ推定できたものは、須貝佳孝家であった。したがって十一棟の最終調査民家のうち、六棟（約五五％）の建造年代が判明あるいは、ほぼ明らかにたわけてあり、過半数を占めた。

表一 4 砂波町の民家の形式分類および形式別編年表（農家9棟、武士の家1棟、町家1棟）

番 号	所 有 者 名	所 在 地 名 (大)	農家形式		柱間表置		構 造		仕上・設備・寸法等		建 造 について の 記 録 等				
			農家 武町	農家 形式	テ エ 表	テ エ と の 表	土 台	軒 裏	大 の 柱 間 表 置	大 仕 上 の 寸 法	一 間 の 柱 間 表 置	不 通 達 の 間 表 置	修 繕 の 年 代	備 考	
1	矢島一男	下高田	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	農家の下は天明3年(1783)の民家の床をかぶっている。
2	竹田幸義	菅原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	名主18年
3	中山彦男	"	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	古い位牌は文化6年、7年
4	佐藤 博治	菅原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	当時はカマヤ(東馬)、昭和15年に50才渡の先祖がカマヤに改姓す
5	須貝佳孝	菅原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	当地に住んでいた「ワザン」が100年位前に建った
6	岩井運治	八木通	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19年
7	岩井祐平	"	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	19年 明治13年に下仁田川から移築したもの
8	佐藤好風	下高田	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	名主 " 明治3年に建造したもの
9	藤井 侃	中里	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	名主 " 明治10年に「クマン」が建造した
10	掛川清芳	菅原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	明治2年生れの先祖が16才の時、鎌倉から買って移築したもの
11	岡部高孝	砂波	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	小樽屋の敷地を譲り、明治になって佐藤姓を掛川に改め移築す

これらの遺構の原形にみられる各種の建築的特徴と、建造年代不明な遺構の原形にみられる平面・構造をはじめ、細部の示す各種の特徴等と比較、検討して編年の指標を求め、平面形式別に区分し、かつ階層差をも考慮に入れて、編年系列をつくること表一4のようになる。

次に表一4において、三つの間取形式に区分された農家遺構九棟と、武士の家棟・町家遺構一棟について、建築的解説や伝承等を記述する。なお、それぞれの復原平面図に記されている室名は、調査時点におけ

るその家の呼び方を尊重して、家人の発音に忠実に記すよう心がけた。したがって同じ間取の、同じ位置の室名でも家が異なれば、呼び方も異なる場合があることを、あらかじめご承知願いたい。また、各家の解説のところで、禁忌作物や正月三日の家例など、その家に伝わる長年のしきたりなども極力記述するよう心がけた。それはその家の昔の生活ぶりや系譜を、より明らかにすることができると考えたからである。

### 三、農 家

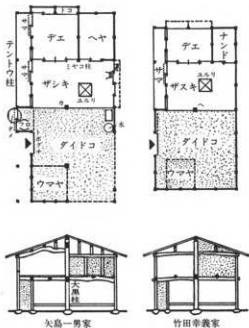
#### (一) 広間型の民家

十一棟の最終調査民家中、広間型に属する民家は、三棟(約二十七%)であった。しかしこの三棟の中には、武士の家一棟を含んでいるので、これを除外すると、農家遺構九棟の中で、広間型に属す民家は二棟ということになり、その占める割合は、農家遺構中の約二十二%ということになる。

この二棟の示す復原平面図および復原断面図は、図一1のようである。

矢島一男家(写真1)は復原すると、梁間四間、桁行六間半の下手

(図 1)



〔写真1〕 矢島一男家 (下高田)

に、一間半のオロシをつけたもので、オロシの表側寄りにウマヤを設けていた。屋根は切妻造りで、トタン葺きである。しかし昭和四十五年までは、葺き板の上に石をのせた屋根で、「イタブキヤネ」と呼んでいたという。イタブキヤネは時々葺き替えねばならず、その時は近所の人達が手伝いあつて葺いた。このように近所の人達が手伝いあつて屋根を葺いたり、家を建てたりすることを、当地では「オテンマイエ」と呼んでいる。間取をみると桁行のほぼ半分の下

手を土間とし、これより上手を床とする。土間はガイドコと呼び、これにそつて梁間いっばいにわたる広々とした室をとり、ザシキと称す。

ザシキの裏側土間寄りには、約三尺角のユルリを設け、大黒柱より裏側のザシキ上部は天井を張らずに、吹き抜けにしていた。ザシキの裏側はトダナを約一・五尺位突き出し、上手は下側を物入れにし、上側を仏壇にしていた。仏壇の上部では、ザシキ内に突き出すように奥行一尺程度の板を張り渡し、この上部を神棚にしていた。

ザシキ表は、中央に柱をたて、この柱より上手を、サマ、にしている。サマとは、敷居を床から一・五尺ほど高い位置に据え、敷居下に土壁をつけ、敷居上に格子棒を嵌めた連子窓のことをい、敷居下から内外へ出入りすることはできない。このようなサマは開口部にみられる古い装置の一つで、特にザシキやデエにサマを残す遺構は、一八世紀中期以前の古い遺構にしばしばみられる特徴である。

ザシキの上手は、表側をデエと称し、裏側をヘヤと呼んでいる。デ

エの表は、ザシキと同様に中間に柱をたて、上手をサマにしている。デエの機能は客室であり、冠婚葬祭時の主室となる。したがって民家において、最も早く畳が敷きつめられるのはデエであり、トコを備えるのもデエである。当家のデエは、すでにトコを備え、畳も敷きつめられていた。

ヘヤの機能は、寢室であった。ヘヤはザシキ側に幅一間の出入口を開くだけで、すべて土壁で閉鎖されている。このようにヘヤ(寢室)の閉鎖性が強いということは、それだけ遺構の建造年代が、古いという証拠でもあるのだ。

古い時代の寢室は、現在のようにフトンを敷いて就寝するのではなく、フトンの代わりに干草や藁を敷いたものであった。古い時代の寢室が、壁で囲われた大きな理由は、寢室に敷かれた干草や藁が、室外へはみ出さないためであったと考えられるのである。しかし、時代が新しくなつて、敷フトンを敷いて寝るようになると、敷草が室外にはみ出す心配もなくなつて、寢室は次第に開放的になつてゆくのである。当家はヘヤを閉鎖的に造つていることから、寢室に敷草を用いて就寝した時代の遺構であると推定できる。

さて、それでは当遺構の建造年代は、いつ頃であろうか。当家は建造年代を示す棟札・古文書等の記録を残していない。しかし、伝承によれば、遺構の下は、天明三年(一七八三)浅間山大噴火の灰をかぶつていないという。そこで、復原された各種の建築的特徴より、当遺構の建造年代を推定すると、およそ一八世紀初頭頃まで溯るものとみてよいであろう。

なお、当家は正月三日日に、餅を食べられない習わしである。すなわち、正月三日日の朝はソバを食べ、正月神にもソバを遣せ、門松にもソバを著つてつんでタケる習慣であるという。また、正月三日日の夜は、麦飯にトコロをかけて食べる習わしであり、正月三日日の食事は、年男といつて戸主がおこなうことになっている。また、先祖理平



(写真2) 竹田幸義家(菅原)

次は関流の和算家で、現在でも「算術導書」(明治二十年)や算木が保存されている。

竹田幸義家(写真2)は梁間三間半、桁行七間の規模で、丁度桁行の半分で土間と床上に区分している。

ザスキでは中央部よりやや裏側寄りにユルリを設け、矢鳥家と同様に大黒柱より裏側のザスキ上部は天井を張らずに吹き抜けにしていた。

ザスキの表側にも矢鳥家と同様に、中間に柱をたて、この上手にサマを残している。デエの表側は、一間半

の幅しかないが、差鴨居を用いており、新しい特徴を示している。ナンドは寢室であり、一坪半の広さしかない。しかし、当遺構の場合も、ザスキ側に開かれた出入口以外は、すべて土壁で囲われていた。

デエは六畳の広さしかない。しかし、上手にはトコを備えていた。当遺構の大黒柱は、土間側をチョーナ仕上げにし、他をカンナで仕上げたもので、逃げもない。

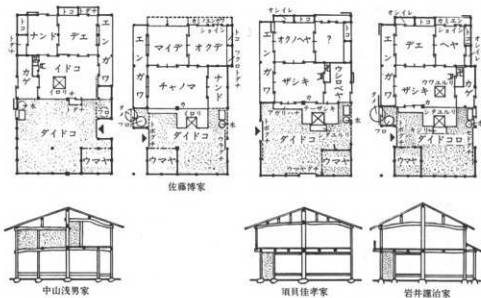
伝承によれば、当主の三代前の先祖が、軒高を全体に約三尺ほど上げたということ以外に、遺構の建造に関する記録・伝承などはないという。

復原された建築の各種特徴などから、当遺構の建造年代を推定すると、およそ一八世紀中期頃まで溯るようである。なお、当家は江戸時代に名主役を勤めていたと伝えている。

## (二) 喰違四間取の民家

十一棟の最終調査民家のうち、喰違四間取の民家は五棟であったか

〔圖 2〕



〔写真3〕中山浅男家（菅原）

ら、その割合は約四十五％である。しかし、十一棟の中には武士の家と町家を、それぞれ一棟ずつ含んでいるので、これらを除外した農家だけの場合でみると、九棟中四棟が喰違四間取の民家ということになり、農家中に占める割合は約四十四％である。

四棟の喰違四間取民家の示す、復原平面図および復原断面図は、図12のようである。

中山浅男家（写真3）には、明治三十八年に描かれた「家相略図」なるものがある。この家相略図によれば、当遺構の規模は、奥行（梁間）四間四尺、間口八間二尺であり、実測値とも合致する。

遺構を復原すると、大黒柱に接してイドコとダイドコの間は幅三七五尺のトダナが設備されていた。また、イドコの裏側下手の間は、引違いの建具を嵌め、ここから裏側の細長い室（カゲ）へ出入りできるようにになっていた。しかし、家相略図には大黒柱に接したトダナを描いておらず、後者の部分にはトダナを描いていないので、イドコから直接カゲの室へ出入りできるようなっていない。したがって、家相略図より遺構の方が古いものであるとみてよいであろう。また、家相略図によれば、大黒柱より裏側は、幅一間の板張床を土間に張り出し、ここにもユルリを設けている。しかし、これも後補のもので、建造当初は、このような施設はなかったものと考えられる。

当家に伝わる最古の位牌は、文化六年（一八〇九）・同七年（一八一〇）のものである。

遺構の復原された各種の建築的特徴より推察すると、当遺構は一八





(写真4) 佐藤博家(諸戸)

世紀末期頃に建造されたものとみて妥当であろう。

なお、当家の先祖は、江戸時代に名主役を勤めていたという。当遺構は、寝室であるナンドにトコやトダの設けられた比較的早い例である。その大きな理由は、名主であったため、ナンドとテエを続き座敷として使用する生活要求を早くから包含していたことによるものであろう。

佐藤博家(写真4)は、梁間四間四尺、桁行七間半余りで、当初カシヤ(草葺屋根)であった。先祖の八十一(明治十七年生、昭和十八年没)が大正元年頃葺き板の上に石をのせた「イタヤネ」に改造し、さらに大正十年頃には、石をのせない板葺屋根である「トントンプキ」にし、昭和四十年に「トクンブキ」に改め、今日に至っているものである。

当遺構は、上手のマイデ・オクデの二室を完全な続き座敷とし、両室とも八畳大の開放的な空間にして、居住性を高めている。特に従来家族の寝室だけしか持っていなかったオクデに、トコ、フクロトダナ・シヨインを設けていることは、大きな変化である。すなわちオクデは、従来ケ(寢)の空間であったが、当遺構の場合ハレ(晴れ)の空間として位置づけられているわけである。

ここで各室の機能について、聞き取りの結果をもう少し詳しく記述してみよう。

オクデは冠婚葬祭時に主室となるもので、結納の時の贈り物も、この室で受ける。結婚式の時は、トコの前に男仲人・新郎・オマチニヨウボ

ウの順で並び、フクロトダナの前には女仲人・新婦・オマチニヨウボの順で両者が相対して並び、三三九度の盃を交わすのである。披露宴の時は、オクデとマイデ境の建具を取り払い、両室を一室(続き座敷)として使用する。この場合、オクデのトコ前を上座とする。またオクデは客人の寝室にも使われた。しかし、死人が出るとオクデに北向きに寝かせたり、湯濯もお産もこの室でおこなうというから、オクデは全くハレの機能だけを受け持ったわけではなく、従来からのケの機能も相変らず持ちあわせていたことになる。なお、当主博さん(明治四十五年生)の体験によれば、オクデに両親が寝て、マイデに若夫婦が寝たということである。

チャノマは、蚤の小さい時、主にこの室で飼育した。だから大きな室になっているのだという。また、客が泊る時は、オクデ・マイデの順に客に開放し、家族はチャノマに寝るといふ。チャノマの日常的な機能は、家族の居間として用いられた。

ナンドの機能は、オカッテ用品の収納場所である。ナンドは「納戸」と書き、本来は寝室の意味である。しかし、最近では物置という意味に変化しつつあるようで、この新しい意味を適用した室名であろう。以下喰違四間取型における各室の機能は、当遺構の場合とほぼ同様である。

当遺構は、建造に関する記録を全く伝えていない。そこで復原された建築の示す各種特徴等より考察すると、およそ一九世紀初期頃に建造されたものとみてよさそうである。

なお、当家は家号を「カミンチ」と称し、作物禁忌は、キューリとトノイモ(サトイモの親の方をいう)である。

須貝佳孝家(写真5)は梁間四間半、桁行約七間五尺の規模で、当初から「イタヤネ」であった。葺板の上に玉石をのせたことから、当家は「イシヤネ」とも呼んだという。遺構の前面は、二階梁を大きく外側へ突き出し、一階の外壁より二



〔写真5〕 須貝佳孝家（菅原）

階の外壁を約一尺五寸ほど外側に張り出している。このような造りを「ダシバリツクリ」（出し梁造り）といい、養蚕を少しでも多くできるように考えたものという。しかし、古老の話によると、「出し梁造り」は本来農家の造りとして考えられたものでなく、古くは店屋や旅館の造りとしてあったものを、農家がまねをしたものだという。

伝承によれば当遺構は、百年位前に「フクパンジヨウ」という大工が建造したという。なお、当地では大工のことを、現在でもパンジヨウ（番匠）と呼んでおり、パンジヨウの前に名前の頭文字をつけて呼ぶ習慣になっている。番匠とは、主に中世の終り頃まで使われた古い言葉で、現在の大工に相当する言葉である。このような古い言葉が、今日でも生きた言葉として、立派に活用していたとは、全くの驚きであった。

当遺構の建造年代は、復原された建築の各種特徴等より推察すると、次に述べる岩井謹治家より少し溯ると考えられるので、一九世紀中期頃に建造されたものと推定しておく。

岩井謹治家（写真6）は梁間四間余り、桁行七間半余りで、当初「イシヤネ」であった。その後、昭和四十八年に現在の瓦葺に改めたものである。なお、イシヤネの時は棟の中央部に、養蚕時の換気のために設けられた「イキヌキ」が一基あったという。

当遺構は、昔ザスキとタイドコロに張り出した板張床の中央部との両方にユルリがあり、ザスキの方を「ウワユルリ」、タイドコロの方を「シタユルリ」と呼んでいた。しかし現在では、ウワユルリをコタツ



〔写真6〕 岩井謹治家（八木連）

にし、シタユルリには、薪を燃料とするストーブを据えている。しかし、シタユルリを、現在でもカギダケを下げているなど、往時のユルリの様子を良く残していた（写真7）。町内全域を廻つてみて、曲りなりにも往時のユルリの様子を確認できたのは、私の知る限り当家だけであり、このように記録できたのは大変ありがたいことであった。なお、ウマヤの裏側では、初摺り白を据えて初摺りをおこなったといい、白を廻す棒を釣った痕跡を天井に残していた。



〔写真7〕 岩井謹治家のユルリ

遺構の表側は、二階の梁を約二尺ほど突き出し、先端に手摺りをつけて、「ニカイロカ」を設け、やはり前述の須貝家と同様に「出し梁造り」と呼んでいる。

当遺構は、明治十三

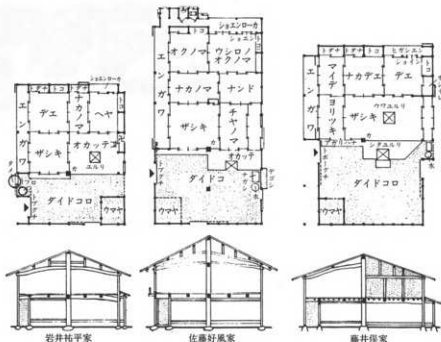
年に下仁田町小坂から移築したものである。

### （三）多間取の民家

十一棟の最終調査民家のうち、多間取の民家は三棟であったから、その割合は約二十七％である。しかし、十一棟の中には武士の家と町家を、それぞれ一棟ずつ含んでいるので、これらを除外し、農家だけ

の場合でみると、九棟中の三棟が多間取の民家ということになり、家中で占める割合は、約三十三%である。

(図 3)



岩井祐平家

佐藤好風家

藤井侯家



(写真8) 岩井祐平家 (八木蓮)

多間取の民家の示す復原平面図および復原断面図は、図1-3のようである。

岩井祐平家(写真8)は、梁間約五間二尺、桁行約七間の規模で床上の上手に三室をとり、デエとヘヤの間にナカノマを設けたものである。屋根を現在トタンブリキにしているが、当初は「イタヤネ」で、棟上に二基の「イキダシ」を上げていた。

ヘヤは冠婚葬祭時に主室となるが、ナカノマ・デエの間仕切を取り払って、ヘヤ・ナカノマ・デエを一室の空間として使用する。ヘヤはまた、日常においては、若夫婦の寝室となる。死人の出た時は、この室に北枕で寝かせ、湯灌もこの室でおこなう。

ナカノマには年寄夫婦がねた。そして、デエは客人の寝る室と決っていた。また村の集会や寄り会いなどの時は、デエとザシキ間の間仕切を取り払い、デエとザシキを一室にして使用した。

オカッチは、家族の居間であった。しかし食事もこの室でおこなったというから、食事室も兼ねていた。

当家は屋号を「クボ」といい、禁忌作物はウリとトクサであった。しかし、大正時代に神主に祈禱してもらってから、作るようになったという。しかし、現在でも一番はじめにとれたウリなどは、神棚に連れてから食べるようにしているという。

当遺構は、明治三年に建造したものと伝えられているが、復原された建築の各種特徴等からみても、伝承のとおり明治三年に建造されたものとみてよいであろう。なお、当家は江戸時代に、名主役を勤めた家柄



〔写真9〕佐藤好風家（下高田）

である。

佐藤好風家（写真9）は梁間約五間半、桁行十間二尺五寸で、調査遺構中最大の規模であった。

当家の平面は、噴達四間取の上手と下手の室間に二室を加えて、六間取にした間取と考えられ、エンガワを上手にも廻し、上手表側の限部には、内便所を設けていた。

当遺構は養蚕の影響を顕著に受けた民家とみられるもので、前面を「出し梁造り」にし、棟上に三基の「イキダシ」をのせ、鴨居上部をラ

ンマ障子にするなど、屋内の通風換気に配慮している様子がみられる。当遺構は、明治一〇年「クメバン」という大工が建造したものといい、「クメバン」の墓が残っているというので、確認することになった。

「クメバン」の墓は、佐藤好風家の墓地の近くにあり、礎石の上に三段に組まれた墓石の正面一段目には、田中の文字を彫り、細長い最上段の墓石正面には「大棟清昌信士、昌庵妙光信女」と刻まれている。これは妻「きん」が生前に建てたもので、七二歳で没している。田中桑次郎といい、昭和八年二月四日、大工で没している。

郷土に伝わる古老の話によれば、大工桑次郎は越後の出身で、数え年十六歳の時、棟梁として当遺構を建造したものである。当遺構の上棟の時、あまりに若い棟梁なので頭（高職）が、若い棟梁をからかってやろうということ、小屋東の一本を隠した。そして束が一本たりない。棟梁が作り忘れたのではなかりかと、若い棟梁「クメバン」に詰め寄った。しかし、クメバンは束一本たりとも、作り忘れることなど絶対ない。現場のどこかに行くと、皆で探して

ほしいといひ、自らも探し始めた。頭はこの自信あふれるクメバンの言葉に胸を打たれ、隠した束を探し出したふりをして、クメバンに差し出したという。以後クメバンは若いけど、立派な大工だということになり、仕事も順調に運び、クメバンの人気も上ったということである。

当遺構は、建造された当初から、妙義下で一番大きな家といわれ、近在から注目されてきたという。遺構をつぶさにながめればなめるほど、あまりにも立派にできているので、とても十五歳の大工が建造したものとは考えられず、すぐれた養蚕農家の遺構例である。藤井侃家（写真10）は梁間六間半、桁行約九間の規模で、床上の室を五室にしている。

当遺構は明治二年生の先祖が、十六歳の時諸戸から買って移築したものと伝えるから、移築された年は、明治十八年頃とみておけばよいであろう。なお、当家は屋敷と屋内の間取を描いた絵図を残しており、その隅部に「北甘菜郡上高尾、高橋恒持 明治二四年七月廿一日」と墨書されている。このことからこの絵図は、移築してから六年後に、上高尾の住人高橋恒持によって描かれたものであることが判かる。

この絵図によれば、土間に接するザシキはデエとナカデエの間仕切の延長線上で仕切られている。しかし、大黒柱より裏側のザシキ上部は、吹き抜けになっていた痕跡があるので、移築当初の間取は、図一3のようであったと考えられる。

当家は家号を「タヤ」といい、明治末年まで酒屋をしていたという。



〔写真10〕藤井侃家（中里）

また、遺構の屋根は、昭和十四年まで葺き板上に石をのせたもので「イタヤネ」と称し、棟上にある「イキヌキ」もイタヤネであったという。そして、昭和五〇年頃まで「シタユリ」を使っていたという。

#### 四、武士の家

十一棟の調査民家のうち、武士の家は掛川満弥家ただ一棟であり、

(図 4)



掛川満弥家

間取は図4のような三室の広間型であった。

掛川満弥家(写真11)は梁間三間半余り、桁行七間四尺五寸の規模である。三室の広間型でありながら、上手の表側に四疊大のヨリツキを備え、オクリノデエは裏側にトコを備え、上手一間を開放してここより直接採光して、オクリノデエを格式高い空間に仕立てている。このようなところに同じ三室の広間型でありながら、農家である矢島一男家や竹田幸義家と異なる室内構成をみるこ

(写真11) 掛川満弥家(菅原)

と異なる室内構成をみるこ

ができる。

当家の大黒柱の径は五寸一分×六寸五分であるから、他の間仕切柱の径と比べてあまり太くない。また、四面を角刃のチョーナで仕上げている。これは広間型の間取と合わせて、当遺構がそれなりに古いことを示す証拠であろうと考えられる。

当家では遺構の建造年代についての記録・伝承等を残していない。したがって遺構の示す原形の各種特徴等から建造年代を推定すると、およそ一八世紀中期頃まで溯るものと推察できる。

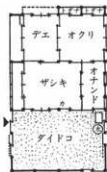
当家は江戸時代に小幡藩の教導職試験を勤めた由緒ある家柄で、明治になって佐藤の姓を掛川に改め、帰農したものと伝え、刀を始め教導職試験を勤めた時代の先祖の身の廻り品や、道具などを、今でも大切に保存している。

屋根は当初「イシヤネ」だったものを、昭和二年にトタン葺に改め、今日に至っているという。そして当時、村内で最も早いトタン葺として、大変珍しい存在であったと伝えている。

#### 五、町家

十一棟の調査民家のうち、町家は岡部高喜家ただ一棟であり、間取は図5のような喰違四間取であった。

(図 5)



岡部高喜家



〔写真12〕岡部高喜家（妙義）



〔写真13〕2階の表側にみられる切子格子とその下の彫刻（岡部高喜家）

岡部高喜家（写真12）は、妙義神社の門前街道に面してたつてゐる。規模は、梁間四間、桁行四間のイシャネ切妻総二階造りの下手に、桁行二間半の下屋をつけ、ここをダイドコにしたものである。

当遺構は、妙義神社の建築に関係した大工が建造したものと伝え、旅籠屋らしい風流な外観意匠を表現している。二階に八畳大の室を田字形式に四室とり、この室を主に旅籠の客室に当てていた。出し梁造りにした二階の前面は、低い腰壁のついた肘掛窓とし、窓の外側には、旅籠屋にふさわしい切子格子を嵌め込んでいる。また、切子格子下部の小壁中央には、四種類の手の込んだ彫刻を嵌め込み、これと切子格子が大変良く調和し、この建物の前面意匠を一層引き立てている。

この四種類の彫刻は、向って左から楠・亀・松・矢羽根をあしらつたものである。そして特に、亀・松・矢羽根は、当家の往時の屋号「カメマツヤ」を表現しているものと伝え、また矢羽根は、当家の家紋でもあるという（写真13）。

当家のすぐ東北に、小高い山があり、通称殿山と呼んでいる。この

山頂に当遺構を建造した大工の墓があるというので、足を運んでみると、当家の先祖の墓石にはさまれて、明らかに大工の墓石とみられるものが立っていた。墓石の正面には「棟求道梁信士」とあり、右側面には「天保八酉十二月十二日 松本九太夫」と線刻されていた。したがって当遺構は、大工松本九太夫によって、彼の没年である天保八年（一八三七）以前に、建造されたものとみてよいであろう。

なお、当家に伝わる古い神棚の中に、小さな巻き物（掛軸になつてゐる）があり、これに「北辰鎮宅靈符尊、上州碓氷郡鼻高村少林山印施、文化九壬申歲三月吉祥日」とある。この小巻き物は、現在の高崎少林山が文化九年三月に発行した家屋の守護札とみられるものであることから、当遺構の新築時に先祖が神棚に納めたものと推察される。したがって当遺構は文化九年（一八一三）、松本九太夫という大工によって、建造されたものと判断してよいであろう。

また、当遺構の特に注目すべき点は、建物の基本寸法に「関東間（一）間の柱間寸法を芯々で六尺にとること」を採用していることである。県内民家の場合、関東間で建造されるようになるのは、一般に明治中期以降のことであるから、当遺構は関東間で建てられた非常に早い例であるということになる。これは恐らく松本九太夫が、江戸出身の大工であったことによるものであろう。また、このことから推して松本九太夫は、江戸の大工が建造したと伝える妙義神社の建築、それも恐らく安永三年（一七七四）に建造された総門の建築工事に関係した大工とみてよいであろう。

岡部高喜家は、妙義神社の門前街道にあつて、落ち着いた風情と歴史の重みを伝えてくれるばかりでなく、その姿は文化年間の旅籠の景観を今日に伝える遺構として、大変貴重である。

## 六、柱について

調査中において、荷重を背負う構造的な柱で、名称を聞き取りできたのは図-6に示した1・2・3・4の四柱であった。

屋内のほぼ中央にたつ柱1は、ダイコクバシラ（大黒柱）と呼ばれ、どこの地区でも同様な名称であった。

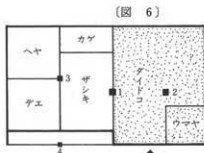
当地方では、大黒柱に対応してダイドコにたつ柱2の存在する例は、少ない。また、たまたま存在した場合でも、その柱名を伝えている家は、極めて少なかった。例えば調査民家十一棟の中で、2の柱の存在した例は、三棟だけであった。その中で柱名を聞き取りできたのは一件で、ショウダイコク（小大黒）と呼ばれていた。

1: 大黒柱

2: 小大黒柱

3: 都柱

4: 天道柱



3の柱名は、十一棟の調査民家中、四件を聞き取りでき、いずれもミヤコバシラ（都柱）と称していた。

4の柱名も、十一棟の調査民家中、四件の聞き取りができ、いずれもテントウバシラ（天道柱）と呼んでいた。

天道柱については、いくつかの習俗を聞き取ることができたので、それを掲げておく。

まず、どの家でも七夕様の竹飾りは、天道柱に結びつける習わしである。また、柱の上部外側に小さな棚をつくっておき、七夕祭りの日はもちろんのこと、毎月一日と十五日に朝飯を進せる。こうすると天災を防ぐことができるのだと信じられ

ている。また、日食の時にはダンゴや饅頭など丸い物を進せ、彼岸の時は、ポタモチや赤飯なども進ぜたという。

なお、十五夜・十三夜には、十五本あるいは十三本のススキを天道柱にしぼりつけ、ミ（箕）の中に秋の収穫物である柿・栗・里芋・薩摩芋・大根などを入れ、天道柱の近くに進せると同時に、天道柱の小棚にはダンゴか饅頭を進ぜたという。大根は必ず二本を並べて進せるものとしている。それは十五夜様あるいは十三夜様の著になるからであるという。

しかし、エンガワの先端に最近流行のアルミサッシを嵌めたりする家の多くなった今日では、天道柱に棚をとりつけることがむずかしく、また戸を閉める関係から、七夕様の竹飾りやススキを天道柱にしぼりつけることもむずかしくなってしまった。このような理由から現在でも前述のような習俗をおこなっている家は、極めて少なくなつてしまっている。

## 有形民俗文化財

### はじめに

今回の有形民俗文化財の調査では、全体の調査日程とは別に組まれた民家調査班の日程に従い、民家調査に同伴する形で実施した。調査地区は菅原・八木連・中里・下高田の四地区である。調査軒数は六軒、それぞれの調査宅で予め用意して頂いた資料を中心に写真撮影・計測・聞き取り等を行なった。

ところで、有形民俗文化財と一口にいつても、その概念は極めて広くおよそ生活領域全般に保つるものであり、その対象や内容が必ずしも明確でない場合もある。また、個々の資料も、生産生活・社会生活・精神生活といった多様な生活体系の中で有機的な相関関係を保ちながら存続してきており、中にはすでに姿を消してしまつたものや、今日の近代用品にとつて替わられているものも少なくない。

こうした点からすれば、本報告で紹介する資料は量的には生活のほんの一側面を垣間見る程度のものであり、内容的にも他の各項目の報告とは切り離しては考えられないかと思う。

調査点数は百五十点余り、その中には刀や槍・絵画などの軸物等があったが、それらは割愛させて頂き、本報告ではこの調査の目的とするいわゆる庶民生活に係わりのある用具だけを掲載した。調査資料は僅かであり、これが調査期間・調査人員等の物理的な制約があつたにしても、なお地域的な位置づけができなかつた点は、調査を担当した筆者の責であるとして、一応の二・三の課題を列記しておきたい。

調査に当たっては、当初麻作りや楮栽培・楮皮生産に関係する用具、板葺屋根と板割職人などに関する用具等に地域的な特色がみられるのではないかと予想していた。

麻は、吾妻町の岩島地区を中心とした吾妻地方と、富岡・甘葉などの西毛地方が県内の主要な生産地であり、明治初期の「上野国郡村誌」にもこれらの諸地域の町村の産物に麻が多く掲載されている。楮は、下仁田町・南牧村・甘葉町の一部（秋畑など）などが神流川谷の諸村とともに、かつては一大製紙地帯を形成しており、妙義町もこの製紙圏の外側に接する製紙原料の供給地ではなかつたかと推測していたからだった。また、板葺屋根の関係については、鍋川・神流川流域一帯が本県における板葺屋根の分布地域であり、昭和三十年頃まではかなりの板葺民家が残存していた（群馬の屋根葺と壁塗）ということから、これに携つた職人や道具への期待があつたからでもあつた。

しかし、結果的には麻関係ではサツカキやアサキリガマ、板葺屋根の関係ではイタワリナタやキネを確認した程度にとどまり、楮関係ではカズヤと呼ばれる楮の仲買商がいたこと、小正月のケズリバナの材料にカズガラを使用していたことなどを聞いただけで、成果らしい成果が得られなかつた。しかし、これは調査件数の少なさと、たまたま調査先でみられなかつただけのことであり、麻作り・楮栽培・板葺屋根は戦後までも行なわれていたことから、まだかなりの農家に潜在的に残されているかと思う。

農耕や運搬に牛が多く使役されるようになるのは戦後もしばらくしてからで、それも間もなく耕運機が入つてきたために期間は短かかつ



たといわれる。それ以前の畜力にはいまでもなく馬が利用されていたが、これが比較的遅くまで農耕の中心的存在であったためか、馬にまつわる伝承も豊富である。磨墨石や磨墨神社、大桁山などの一連の磨墨伝説や馬の宮の地名、まわり馬場や鉄砲馬場などの草競馬の盛んであったこと、馬を大切にしていた心情が今でも菅原の陽雲寺の馬頭観音の縁日にお参りに行ったり、埼玉県上岡の馬頭観音に出かけていく人がある中に生きている。馬具はシタガネ・ハモを報告する程度であるが、絵馬についてはかつて馬小屋に使用していた場所に、釘で小絵馬を打ちつけた農家が六軒中四軒にみられ、馬を使役していた時代にこうした習俗が一般的であったことを物語っている。

調査資料の中で、わずかだが紀年銘をもつ民具がみられた。下高田の旧家の蔵に保存されていたもので、嘉永五年のマンガク、慶応四年の粉桶、文政三年の木箱の三点である。他にも菅原で元文三年の墨書があつたという斗マスがあるが、煤で確認できなかった。この種の資料については、日本常民文化研究所が全国の博物館あてに実態調査を行なっており、これが民具研究のひとつの潮流となりつつある。資料の時代性を考慮し、この意味を考える上では、数点といえどもそれなりに意義のある成果であつたといえよう。

なお、本文の項目立てについては資料総数が少ないので「一、生産・生業に関する用具」、「二、生活に関する用具」、「三、その他」の三つの大まかな分類で分け、ある程度まとまった報告ができるものについて小項目を設けた。

## 一、生産・生業に関する用具

### (一) 農 耕 具

テンガ 二個のポルトで樫材の柄を締めて固定した金鍬で、一般耕

作用に用いられる。菅原では刃先が減ると松井田の本金金物店でサキガケしてもらつた。テンガに限らず耕作用具は町の金物屋から購入したが、松井田町新畑の補陀寺や菅原の陽雲寺の縁日に出る露店でもよく買求めたという。

柄長—一二七センチ 刃幅—一二、二センチ 刃長—三七、二センチ

サガラ いわゆるトウグワフのことをサガラと呼ぶ。普通にもみれる開聖用の打鍬で、肩の外に出た櫃に樫の柄をさし込む。植林などの山仕事に専ら用いられるが、養蚕も盛んに行なわれており、桑の植え替えや山手寄りのクワバラで畑にはり出してきた篠の根などを断ち切るのによく用いられる。

柄長—九十センチ 刃幅—十三センチ 刃長—二七、五センチ (櫃を含む)

クサツケズリ 畑地の除草用のクサカキである。この種の鍬にも幾つかの種類があるが、これは窓鍬の窓を鉄板で防いだもの。クワバラの草削りに多用された。

柄長—一二〇、八センチ 刃幅—二五、六センチ 刃長—十五、四センチ

エンガ 耕運機が導入されるまではクワバラウナイなどに盛んに使われた耕起具である。エンガは主に畑耕作のジゴセエに用いられたが、田を起こすにも利用された。妙義町は二毛作地帯で、稲を刈り取った後には麦を栽培する。エンガは麦の時種用の麦ウネを作るのに便利だったという。田では、乾田よりむしろ水のけかない水ツキ田をウナイガケするのに都合がよく、古い草刈鎌で浅く筋をつけ、これに沿ってうなつていった。下高田では、床が鉄だけのエンガは無く、④のような風呂形式のものを使つていた。エンガは、出来合いの製品を買うのではなく、カネだけを鍛冶屋から買い、ボウヤにすげてもらつた。動先は銚鉄で、減つてくるとサキガケして何年でも使つた。④は

カネを富岡のマルサワで購入し、七日市のボウヤにすげてもらったもの。

柄長—一九一・五センチ 刃全長—一〇一センチ (鋤先長—六七センチ 鋤先幅—一七・八センチ)

オンガ カジボウを握ってオンガを操作する人をシンドリ、タツナを持ち馬を引く人をハナドリという。二人一組で行なう作業で、このオンガによる耕起作業をスキオコシ・オンガウナイなどという。⑤は和製で、土の反転方向は左である。従って、オンガウナイは左回りで外側まう。田の中心よりない始め、次第に溝を広げるように左回りで行側まう。田のないでは一回だけの一番オコシで済んだが、裏作に麦を作る際には、更に田の外側から中心部に向かって、初めに起こした山をくずすようになつた。これを二番オコシという。

腕木長—一四二・五センチ 床長—一五八・五センチ 舵柄長—四三センチ 鋤先幅—一八・五センチ 鋤先長—五五センチ

サツカキ 麻のサクタチや除草・中耕に用いられる麻栽培の専用工具である。麻のサクは残く、その間隔も五寸程で狭いため、普通のテンガでは使いにくいという。柄が長いのは、刃を地面に立て筋をつけるように柄を引張って使うためで、これだてたサクには一作ごとに糸蒔きで種を蒔く。⑥は戦後しばらくの間、自給用に栽培した麻作りで使っていたものという。

柄長—一五六・五センチ 刃幅—四、六センチ 刃長—九センチ

タノクサトリ ガンズメに相当する田の草取り用の除草具であり、ハツクドリが出回るまで使われていた。両手に一丁ずつもったタノクサトリで、中腰の状態に稲株の間の雑草を掻き回し、浮草にした。田の除草は、六月末に田植えが済んだその一週間後に行なう一番草と、更に一週間から十日後に行なう二番草、それに丁寧な農家では二番草後二週間程たってから行なう三番草があるが、タノクサトリの使用は二番草までであった。

柄長—二二・七センチ 刃幅—一〇・五センチ 刃長—九・三センチ

オシマンガ 田畑の整地で、牛馬に引張らせて用いる畜力用の砕土用具。九本の鉄製の歯を打ち込んだ台木の前方に取り付けられた鉤に、麻製のハヨウナワを結び、これを牛馬のシログラに結んで引張らせる。田の代掻きでは、よく掻けば水もちが良いといわれ縦横に何回も掻いた。オンガでうなつた後のまだ土塊のままの時に掻くことをアラクレといひ、クロを塗つてからの整地をナカシロ、肥料をふり仕上げのために掻く作業をウワシロを掻くといつた。田の端より掻き始め、マンガ市巾分位の間をおいて回り込んで掻いてゆく。掻き残した部分のことをシマ、小回りがきかないために残つた田の四隅をマミといつた。

柄長—六六・五センチ 高さ—六五・五センチ 台木長—一九一センチ 台木幅—八・四センチ 台木厚—五・二センチ 歯長—一九・五センチ 鉤長—一四・五センチ

ズリマンガ ホオリマンガ ⑨は畜力利用、⑩は人力用のマンガで、ホオリマンガは別にフウフマンガともいう。⑧のオシマンガは古くからあるが、ズリマンガやホオリマンガは新しい農具であり、⑨、⑩ともに昭和十年代に購入している。ことに、ズリマンガは、ホオリマンガと耕運機の利用の間に普及したもので、使用期間が短かく格子状の台木や歯はほとんど減つていない。

これらのマンガは、稲の収穫後の田で麦を栽培する際のスキオコシ後の土コナシに用いられた。スキオコシされた田には、イネガツバの付いたコゴリがあり、まずこれを牛馬に引かせたズリマンガでこなした。アラコナシという。ズリマンガは、台木の一隅に打ち込まれた鉄のカんに、ハヨウナワを結んで引かせるため、マンガの対角線の延長上を斜めに進むことになる。ある程度こなせると石や子供を重しとしてマンガの上に乗せ更によくこなした。マンガの使い分けは、農家によつても異なるようであるが、藤井家の場合、ズリマンガの後はオシマ



②サガラ 須貝佳孝宅 菅原



④エンガ 藤井照治宅 下高田



⑥サッカキ 岩井祐平宅 八木連



①テంగా 須貝佳孝宅 菅原



③クサッケズリ 須貝佳孝宅 菅原



⑤オンガ 藤井侃宅 中里

ンガで平にならし、最後に残った小さなコゴリをこなすのにホオリマ  
 ンガを使ったという。ホオリマンガは、四隅のカんに縄を結び、これ  
 を二人で持って左右に振りながら移動しつつ作業する。一日の作業量  
 は約一反くらいだったという。  
 スリマンガ 台木横長―九一センチ 台木縦長―九一センチ 齒長

二二センチ  
 ホオリマンガ  
 齒長―一四センチ

台木横長―九一センチ 台木縦―五四・五センチ



⑩ホオリマンガ  
藤井侃宅 中里



⑨ズリマンガ  
藤井侃宅 中里



⑦タノクサトリ 掛川調弥宅 菅原



⑧オシマンガ 藤井侃宅 中里

## (二) 脱穀・調整具

センマイ 脱穀用の千歯コキのことをセンマイあるいはセンバと呼んでいる。菅原や下高田では麦用のセンマイは使ったことがないとい、小麦の脱穀にはムギブチ、大麦の場合は火で穂を焼き落とすムギヤグリの方法だったという。⑩も歯数は二十五本であるが、製作地が異なるためか⑨の方が肉厚に仕上げられている。⑪の佐藤家のセンマイには、台木のいたるところに焼印・墨書がみられ、また十三本目の中央の歯の表裏に刻印がみえるが判読できない。焼印から島根県産のセンマイであることが分かる。

センマイ⑩ 歯幅(全体)一三二センチ 歯長一三二センチ 台木長一五八・五センチ、台木幅一五・二センチ 台木高七・八センチ

センマイ⑪ 歯幅一三二センチ 歯長一二・五センチ 台木長一六〇・五センチ 台木幅一五・八センチ 台木高一八・四センチ  
ムギブチ 小麦用の脱穀用具。割竹を二本合わせた十三の棧を区切る一区画が一人分の脱穀作業の範囲で、⑩のムギブチでは四〜五人で作業したという。作業の際には、ムギブチの下にムシロを敷き、よく乾燥させた麦束イチワを両手で持って棧に打ちつけて実を落した。明治の終り頃には、こうした脱穀作業に越中から毎年手間取りが来て手伝ったものという。ムギブチも足踏み脱穀機が普及することによって次第に使われなくなった。⑬は終戦後まもなくまで使っていたものである。

全長一三三センチ 高一六四・五センチ 幅六〇センチ  
クルリ センマイで脱穀した稲、ムギブチやムギヤグりで脱穀した小麦・大麦は、実とともに穂首も混じっているので脱粒作業を行なわなければならない。クルリはこのための道具で、庭に広げた籾や麦を数人でその周囲を移動しながら回転棒を打ち下した。また、クルリは大

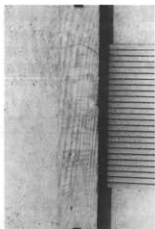
豆や小豆などの豆類の脱穀にも活躍した用具である。  
全長一五四・三センチ 幅二九センチ 回転棒長一九七・七センチ

ムギトオシ 穀物調整に用いられたフルイには、目的に応じて種類が異なるが、⑮、⑯、⑰はいずれもクルリで脱粒された後の麦を、主に選別するために用いられたものである。⑮は竹製のムギトオシで、従前は荒く井桁状に組まれている。⑯は曲物を縁とし、篩部は金網である。⑰はコの字形の鉄棒でトオシを支え、柄を握って前後に揺り動かしながら作業するように工夫されている。これは、麦だけでなく大豆や稗の選別にも使われ、篩の中に残ったカスは前方へ勢いよく放り出した。注文して作らせたもので、竹田家ではこの型のトオシを使う前が⑮や⑯のようなマルツトオシだったという。

ムギトオシ⑮ 直径一六七センチ 深一八センチ  
ムギトオシ⑯ 直径一五〇・五センチ 深一一・五センチ  
トオシ⑰ 長一〇九・三センチ 幅一五七・五センチ 脚部長一五



⑩センマイ 佐藤好風宅 下高田



⑪-1 佐藤好風宅 下高田  
センマイの台木の墨書銘



⑪-2 佐藤好風宅 下高田  
センマイの台木の焼印  
「島根県内松原」

六センチ

マンゴク 扱摺りが終わった後の米はマンゴクにかけて、上米とコゴメ(クズ米)にふるい分けられる。漏斗部よりミなどを使って入れられた米は、上米が篩の前方に流れ落ち、不均等な小粒のコゴメは金網の篩の目をくぐって下に落ちる。マンゴクにかけた米はトマスで計ってタワラにつめられた。

農具に銘を書き入れることは稀だが、マンゴクにはよく篩部の側板に製造者などの墨書が残されている側が多い。⑱にも左側側板の外側に「上州宇田 廣木屋保治口」とみえる。右側側板にもマンゴクの性能を表示したらしい墨書がみえるが、嫌が附着して判読できない。また、篩の先端を支える脚部のはめ込み板には「嘉永五年 子十月十九日 下高田村佐藤嘉平衛」の墨書がある。佐藤嘉平衛氏は現当主佐藤好風氏の五代前に当る。

全高一二二センチ 幅一四六・五センチ(漏斗幅一五五センチ) 長一四六センチ 深一二五センチ



⑩ムギブチ 竹田幸義宅 菅原



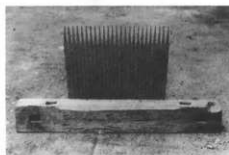
⑪-4 センマイの台木の焼印  
佐藤好風宅 下高田  
「本場製造所神石爾兵衛」



⑪-3 センマイの台木の焼印  
佐藤好風宅 下高田  
「請台改別製神貞」



⑫ムギトシ 佐藤好風宅 下高田



⑬センマイ 藤井照治宅 下高田



⑭ムギトシ 藤井侃宅 中里



⑮クルリ 佐藤好風宅 下高田

(三) 切 截 用 具

クサカリガマ・ナタガマ ⑯は、朝飯前に馬の飼料や推肥にするための草を刈り取ってくる時のアサヅクリの仕事などに用いられたクサカリガマで、普通の草刈り用のカマより柄が長く、両手で柄を握って



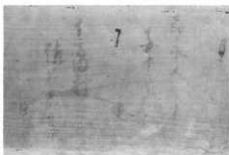
⑯-1 マンゴクの墨書銘  
佐藤好風宅 下高田



⑰トオシ 竹田幸義宅 菅原



⑱ マンゴク 佐藤好風宅 下高田



⑱-2 マンゴクの墨書銘  
佐藤好風宅 下高田



⑱-3 マンゴクの墨書銘  
佐藤好風宅 下高田

草を刈った。菅原では、アサヅクリには大桁山に出かけ、一駄(六束)刈ってくるのに朝暗いうちから十時頃までかかったという。

⑳はエチゼンガマのクサカリガマ。タンボミチ・アセなどの草を刈る際に用いられる一般的な草刈ガマで、欠けても良いように余分に一丁持っていく。作業をする時は、一丁のカマで草を刈り、もう一丁のカマで刈った草をかき寄せた。

山林の下草刈りには大ガマのシタカリガマを使うが、ユルリヤカマド・風呂を沸かす際の燃料になるボヤを集めるには、厚手の刃の丈夫なナタガマを用いた。ボヤコセエは主に男衆の冬の仕事で、十二月頃から三月頃までの間に一年分のボヤを用意するのに、㉑のようなナタガマを持って山に入った。ボヤにする木は、炭焼き用の櫓の木を除いた雑木を対象で、木の途中を手でつかんでは根元を切り払った。

㉒ノコギリガマ 稲刈り用のノコギリガマは、イネカリガマとも呼ばれる。柄は短かく鋸歯であり、稲株の根元を鋸のように手前に引いて刈り取る。

アサキリガマ アサキリガマは麻の収穫の際に用いられるカマで、  
②・③のように二種類の形がみられた。妙義町はかつて麻作りが盛ん  
に行なわれていた。麻の収穫は、幹を手でひとつかみずつこぎ、葉や  
根を切り落して五寸程の束に束ね天日で乾燥した。アサキリガマは、  
この葉を切り払うために用いられたもので、根を切り落すにも使われ  
た。

カワムキガマ 杉皮には秋皮と春皮があり、秋皮で上手に葺いた屋  
根なら十五年位はもつたという。カワムキガマは、この杉皮葺きの屋  
根材を採取するための用具で、主にコビキの人が使っていた。伐材し  
た杉の木から剥ぐ杉皮は、水分のあるうちに剥ぐのが良い。まず、カ  
ワムキガマで丸木の周囲に切り込みを入れ、杉皮の長さを計つてもう  
一方にも切り込みを入れる。次に、切り込みの部分にカマの背を押し  
込んで前方に突くようにして皮を剥ぐ。このため、カワムキガマの背  
は両刃になっていて、切れるのが特徴である。また、カマの長さを杉  
皮の長さとしたので、カワムキガマが尺棒にもなっていた。

タケワリナタ タケワリナタにも幾つかの種類があるが、④はショ  
ウギやミノコシなどの小細工をする際に用いられるナタである。竹を  
割る場合、片刃だと一方へそげてしまうので刃は両刃である。使い方  
は、竹の断面に刃を立て、力を入れて割れ目をつけた後左右にこじつ  
て二分する。かつてはコザルなどの小物の竹細工くらいは自分の家で  
作つたものだといふ。

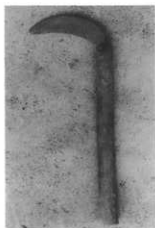
全長一三三・九センチ 柄長一一三・五センチ  
イタワリナタ キネ 葦板をオシウチダゲで押え釘でとめた大和葺  
きの板屋根や石を置いた石置き屋根などの板葺屋根の板材を製作する  
ためのナタであり、その他に大割り用のナタがあった。板材には栗を  
使い、材に直角に当てたナタは⑤のキネで、背を叩いて割りを入れ、  
あとは引き割るようにして柾目の板を得た。板割りの仕事はキコリが  
専業としてやっていたが、八木連では越後から来た大橋という人が板

をひいたり割つたりしていた。菅原や下仁田町の小坂には板割り職人  
が何人かいて、この辺りの農家では屋根葺きの時期になるとそこまで  
買いに行つた人もいる。⑥は職人を買つたくなり葦板を購入することが  
できなくなつて、自分で始めるのに買ったものである。昭和の初めに  
富岡のマルサワ商店(金物屋)から二円五十銭で購入した。

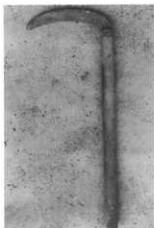
イタワリナタ 柄長一一二センチ 刃渡一一二五センチ  
キネ 長一一一センチ 径一八センチ  
イシツチナタ もともとは刃の先端に突起の出た鼻付鉈であつたも  
のを削り落とし、普通のナタに改良したものであつて、イシツチの呼  
び名は、誤まつて地面を叩いてしまつた際に石などで刃がこぼれない  
ように、この突起で防いだところからきている。主に山仕事で使用。  
全長一三四・五センチ 柄長一一七・二センチ  
ノコギリ ⑧と⑨はタチビキノコで板材を作るのに用いた。このう  
ち、⑧は主にコビキが丸太から柱や板をとるのに用いたもので、ヤグ  
ラを組んだ上に墨をつけた丸太をかけ、柄を両手を組むようにつかん  
でひいた。⑨はヨコビキノコ。山で燃料にするマキをとるのによく用  
いた。二種類のノコギリの違いは、タチビキが目の方で刃が一定方向  
で歯に角度をつけないのに対し、ヨコビキは目を交互にたて、各々の  
歯を左右に多少曲げて角度をつける点にある。ヨコビキの歯の傾斜角  
度は経験で調節するが、余り広げすぎると切りにくいし、角度が狭い  
とノコギリが木にはさまつて動かなくなつてしまう。また、たて終つ  
た後の具合は、ノコギリを縦方向から見て、交互の歯がつくるV字形  
の谷が、先から元まで一直線であるかどうかを調べる。

タチビキノコ⑧ 柄長一一二・五センチ 刃長一六二センチ 刃幅  
一八・三センチ  
タチビキノコ⑨ 柄長一四五・二センチ 刃長一三三・五センチ 刃  
幅一八・八センチ  
ヨコビキノコ⑩ 柄長一五六・三センチ 刃長一四九・五センチ 刃

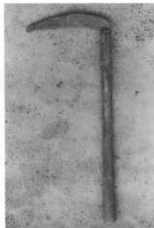




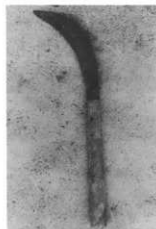
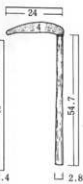
⑲ ナタガマ  
掛川満弥宅 菅原



⑳ クサカリガマ  
掛川満弥宅 菅原



㉑ クサカリガマ  
掛川満弥宅 菅原



㉒ アサキリガマ  
掛川満弥宅 菅原



㉓ アサキリガマ  
岩井祐平宅 八木連



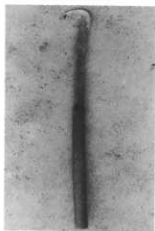
㉔ ノコギリガマ  
掛川満弥宅 菅原



㊦ タケワリナタ 岩井祐平宅 八木連



㊧ カワムキガマ  
掛川満弥家 菅原



㊨ カワムキガマ  
掛川満弥宅 菅原



㊩-2 竹割り  
岩井祐平宅 八木連



㊩-1 竹割り 岩井祐平宅 八木連



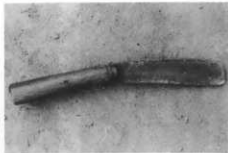
㊪ キネ 岩井祐平宅 八木連



㊫ イタワリナタ 岩井祐平宅 八木連



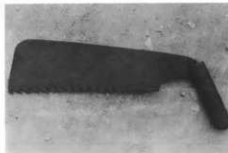
⑪ タテビキノコ 岩井祐平宅 八木連



⑫ イシツチナタ 岩井祐平宅 八木連



⑬ ヨコビキノコ 岩井祐平宅 八木連



⑭ タテビキノコ 岩井祐平宅 八木連

#### 四 そ の 他

カイクカゴ 養蚕に使うカイクカゴには、大カゴ・八分カゴ・七分カゴ・ハンカゴなどがあるが、菅原や千福寺辺りでは大カゴを使う家が多く、コガイコをする家では小さいカゴを使う。昔は春蚕・初秋蚕・晩秋蚕の三回行ない、昭和になってドテガイが普及するまでは、コノメを立てカイクカゴをそれに挿して飼う棚飼いだっただ。カイクカゴはカゴヤを頼んで作ってもらった。十月から冬至までの竹の切りシんに切っておいたものを使い、冬から春までの間に作ってもらった。大体三年に一度の割で修理を頼み、この時に新しいカゴを20枚前後作った。

縦一八五センチ 横一九八センチ

シチリン 糸とり用のシチリンである。藁はシチリンにかけたセトビキのイトヒキナベの湯の中に入れ、ミゴのホウキで糸口を出しザグリの糸枠に結んで糸をとる。手前の口より炭をつぎたし湯はいつもさめないようにしていた。

高一二七・五センチ 上部一四五・四センチ 底部幅一二五センチ  
ワタクリ 木綿の種子をはじき出して綿のみをとる用具であるが、現当主の記憶にもない道具であることから、大正時代以前に使用されていたものである。種子をはじく縦棒の下にはめ込まれた板に「高崎本町三丁目⑩」の墨書がある。その裏面には「さつてや 八十七」とみえる。

長一四五・八センチ 幅一二七センチ (台幅一八・七センチ) 高一一八・六センチ

コエオケ 肥料運搬用のオケで、コエビシヤクでかい出した人糞尿をこれに入れ、テンピンボウで担いだ。畑に運ぶ時には、馬にビクをつけ、それに四個のオケをつけて運ばせた。コエは自分の家になまったものを使ったが、農家の中には松井田町まで買いに行く人もあった。



⑭ ショイコ  
掛川満弥宅 菅原



⑮ コエオケ コエオケ  
藤井夙宅 中里



⑯ オオカゴ  
藤井照治宅 下高田



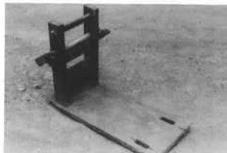
⑳-1 ワタクリの墨書銘  
佐藤好風宅 下高田



㉑ シチリン 藤井照治宅 下高田



⑳-2 ワタクリの墨書銘  
佐藤好風宅 下高田



㉒ ワタクリキ 佐藤好風宅 下高田



㉓ カッシャ 佐藤好風宅 下高田

高一八センチ 直径—三七センチ

ショイコ 桑やボヤ、マキなどを背負う際に用いるもので、馬が入れるところまで運び出すのによく使った。ショイコは、平らな場所より山での仕事に使うことが多く、昔は皆これで荷物を運んだ。この辺りではセナカアテは使わず、ショイコ専門である。形は⑩より大きいもの、小さいもの色々で、爪のあるショイコもあった。これらは地元の大工で作ってもらうが、器用な人なら自分で作ってしまったという。背の当る部分に残った縄のことはオツラといった。

長—一〇六センチ 幅—二六・一センチ

滑車 松の木を輪切りにし芯を抜いて作った自家製の滑車。製作された時期は分らないが、二階で養蚕をする際に庭から桑束を引き上げるのに用いてきたという。

幅—一三・五センチ 直径—三四・八センチ

## 二、生活に関する用具

### (一) 食 制 用 具

セイロ セイロには縁に曲物を用いたものもあるが、⑪は四つ重ね、井桁形のセイロでそれぞれのセイロの底に二本の渡木を設け、竹貫を敷いて用いる。餅搗き用の糯米や赤飯などを蒸した。蒸し加減が上と下では異なるため、時々上下を入れ替えて平均に蒸れるような配慮が必要だった。使用されなくなつてから五十年以上経過しているという。

メンバ 櫛を材料にした曲物の弁当箱で、漆を塗っているためやや赤みがかつた光沢がある。田畑での農作業や山仕事には、これを麻製のショイビクに入れて背負つたり、風呂敷で包み腰に結びつけて出かけた。メンバの中の飯は、麦四分、米六分のヒキワリメシで、これを身と蓋の両方につめ、梅干や漬物をおかずにしていったという。

直径—一五センチ 深—一六センチ

メシツギ 櫛の曲物を板の皮でつめ、漆をかけてある。ホカイに当る容器で、七月半ばすぎの農休みやアキアゲなどで農作業にきりがつく。嫁はコワメシやおハギを入れて実家に里帰りし、帰りはウドンを入れて持ってきたという。また、四十九日の念仏の時などには、近所の人がこれに小麦の粉を入れ、五十錢位のをせてやってきたという。その他、コジュハン(三時休み)の時にも、農作業の手伝いに来た人達にヤキモチやムスビを出すのに、これに入れてノラまで運んだ。

直径—二二・八センチ 本体直径—二二センチ 深—九・六センチ

カタクチ カタクチには⑫のように注口を胴部に取り付けたもの、口縁部の一端を張り出させて注口としたものがある。これは二升入りでカタクチとしては大きい方だという。台所の必需品で、自分の家で醸造した醤油は、樽からこれに引いてきて使った。酒も樽で買ってくるカタクチに受けてからトクリに移しかえた。

直径—二二・五センチ 深—一二センチ

豆腐の型 大豆を水にほとばしてイシウスで碾き、釜で煮たものを麻布などでこした汁にニガリを入れると豆腐となる。⑬は豆腐の四角い型を作るためのブリキ製の容器で、戦争が激しくなり、食糧の自給が叫ばれるようになってから使い出したものという。豆腐製造用の豆腐箱には、水抜き穴のある木製容器があるが、これなどは戦時中の自給経済の所産といえる。当時質のよい大豆は殆んど供出させられたので、家では残つた悪い大豆を使って豆腐を作っていた。

縦—一八・七センチ 横—一三・二センチ 深—四・三センチ

ミスガメ 昭和三年に水道が引かれるまでは、外のツルペ井戸からオケで水を汲んで来てミスガメに入れておいた。水運びは女衆の仕事で、オカツテに置いたミスガメは、飲水や炊事などでよく使つたので、一日二回くらいは水汲みに行かなければならなかつた。⑭には蓋が欠

けているが、使用しない時のミズガメにはいつも蓋はしておいた。

直径一四六・五センチ 深一四四・五センチ

テツピン ユルリのある時代には、テツピンは常時湯を沸かしておくのに無くてはならないものだった。カギダケの鉤に吊して湯を沸かし、あるいはゴトクの上に載せておいても湯が得られた。形にも色々あるが、④のような形態をしたテツピンはよく見かけられる。④は針金の吊手で茶釜に似ている。3個のテツピン中最も大きいのが薄くてきており重さはさほどでもない。④は胴が八角で吊手は竹を曲げて使用している。

テツピン④ 直径(最大径)一一・五センチ 深一一五・三センチ

テツピン⑤ 直径一一・五センチ

テツピン⑥ 直径一二三・五センチ 深一一六・三センチ 吊手高一五センチ

テツピン⑦ 直径一一二・六センチ 深一一〇・八センチ 吊手高一八センチ

サラ 盛りつけ用の大皿で、⑧、⑨ともに明治の半ば頃、藤井氏の父親が塚のまわりを開墾して畑にした際に、土中より出てきたものという。山水と鯉絵の染付けで、完形であったのでその後自家の寄り合の際に使ったものという。結婚式の際には、鯉一匹をむしろ魚として、酒盛りが半分程済んだ頃、媒酌人から順に回して食べてもらったという。

サラ⑧ 直径一三〇センチ 深一五センチ

サラ⑨ 直径一三〇センチ 深一三・四センチ

盃 盃台 写真は盃台の上に三つ重ねの盃を載せたもので、結婚式の三三九度の際に使われる。いつ頃のものかははっきりしないが、昭和三十七年頃に使ったのが最後だという。盃は内側が朱漆、外側が黒漆で塗られ鶴の絵が描かれている。盃台は台部が朱、他が黒で塗られている。これを納める木箱には「三棒」と「末広」と箱書されている。

た。三棒は三方であろうが、四面の脚部には四方に彫形がある。

盃(大) 直径一一二・八センチ 深一一二・二センチ

盃(中) 直径一一一・八センチ 深一一二・二センチ

盃(小) 直径一一〇・七センチ 深一一二センチ

盃台 縦一一七・五センチ 横一一七・五センチ 高一四・三センチ

テツピン 蓋がなくなっているが、婚礼の三三九度の儀礼に用いられる釣手のテツピンで、二個で一对となり雄蝶、雌蝶を水引きで釣手の前につけ、六〜七歳の男女が盃に酒を注いだ。婚礼の盃事に用いられるものだから、どこの家にもあったわけではない。普通は隣近所で共有していたが、媒酌人をよくつとめる家にはあった。藤井家でも近所で婚礼が行なわれた際にはよく貸し出したものという。

テツピン① 直径一一四・四センチ 深一一九センチ 吊手高一八・五センチ

テツピン② 一口にテツピンといってもその形や容量あるいは使われ方によっていくつものタイプがある。

大正時代にガラス製の酒ビンが出回るまでは、酒はトックリで酒屋から買ってきた。⑩や⑪が酒買に使われたトックリで、一升入りのビンポドックリといわれる。トックリの口が下ぶくれになっているのは、首に紐を結んでぶら下げた際にはずれないためのものである。藤井氏の曾祖父の使用したのもこのタイプで、「清水屋」「西田支店」の染め付けは、いずれも酒屋の名前で、清水屋は上高田に、西田は富岡市内にあり今も商店を経営している。酒買にはトックリの他に樽も利用され、一升入・二升入・五升入などの樽を背負って酒店まで買いかけてた。富岡市丹生には明治の末頃まで「やまに」(公)と呼ばれた遺酒屋があり、よくそこで樽を背負って買いかけてたという。

⑩は五升入りの大ドックリで口から胴上部にかけて深緑色の釉がかかり、胴部は肌色を呈している。酒の配達のない時代には、買ってきた酒を常備するのに、こうした大型のトックリが使われ、晩酌な

どをやっていた。⑤も五升入トックリだが酒を入れておいた憶えはないという。むしろ、茶壺がわりに自家製の茶を保存するのに用いたといわれ、かつては、自家用の茶くらいはこの家でも作っていたといわれ、ホイロで乾燥させた茶をこの型のトックリで保存したという例は他でも聞かれた。

⑥は磁器製の一升ドックリであるが、日常用のものではなく、人寄せの際に大釜に入れて燗をしたお燗ドックリという。大釜には二〜三本入れてお燗をした。陶製のビンポウドックリなどより薄くできていたためお燗するのも短時間で済んだ。

⑦、⑧は普通の燗ドックリでいわゆるチョウシといわれる。⑨は二合ドックリ、⑩は二合五勺入りで、他に一合ドックリもあった。「かきや」の名は酒店の屋号である。酒は、これらのトックリを小火鉢の茶釜などに入れてお燗をし、オチヨコに注いで飲んだ。

⑪は口が欠けているが一升入りの油ドックリ、⑫は二升入りだが何を入れたものかはつきりしない。恐らく油か醤油を入れておいたものだろう。

酒ビン 酒ビンの出初めの頃のものと思われる。三合入りで「東京森本商店」の文字がみえる。手作りであまり精巧には仕上がっておらず、ビンの底は押しつぶされたような形をしている。

全高一二九・二センチ(首長一〇・七センチ) 幅一七センチ  
イシウス 花岡岩質のひき臼で、上臼・下臼ともよく摩滅して厚みが減っている。製粉用のイシウスで、大豆から黄粉をひいたり米粉をひくのに用いられた。二人がウスを挟んで向い合い把手を二人で握って回す。戦後しばらくの間使われただけで蔵にしまわれたまま五十年近く経過しているという。

コナオケ 水車があった時代には、ひいた小麦粉や米粉をこれに入れて、テンピンボウで前後に吊して家まで運んできたという。胴をしめるタガのうち、上部のタガは修理した際の新しいものだが、蓋と桶に

は紀年銘があり当時のものである。

蓋裏 慶応四年 四月吉日 下高田村 佐藤

底裏 慶応四年 戊辰四月吉日 下高田村 佐藤嘉平衡持主

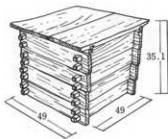
墨書は桶を入手した時点のものかどうかは分らない。当初から水車小屋で使うコナオケ用として用いられていたものなら、小屋を共同使用する他人の持物と区別するために明記したものであろう。

直径 四〇・二センチ 深 五六・五センチ

ヒキワリトオシ ハンメシはヒキワリ麦と米が半分づつ混じったものをいうが、中里ではヒキワリ麦七分に米三分がふだん食べるヒキワリメシで、こうしたかつての主食の大きな割合を占めていたヒキワリ麦を作るには水車が使われた。⑬の臼でひいたヒキワリ麦をふるう際に用いられたフルイで、ふるった後に残る大粒の麦は再び臼の中に返されて細かく砕かれた。昭和の初めまで、この辺りには中里と古立の合同の水車があり、精米などに使われていたが、精米所ができてからはヒキワリトオシも使われることが少なくなかった。



⑬ セイロ 佐藤好風宅 下高田





⑩ 水ガメ 須貝佳孝宅  
菅原



⑪ メンバ 藤井照治宅 下高田



⑫ メシツギ 藤井照治宅 下高田

直径——四五・五センチ 深——九・八センチ  
 キバチ 柄の木を彫って仕上げた大型のキバチで、内側には朱漆が  
 かすかにうかがえる。こね鉢として使ったことはなく、水車小屋で米  
 を搗いたあとの米粉を、フルイに移しかえる際に用いたものという。  
 直径——六三・五センチ 深——一三センチ



⑬ テツピン 藤井照治宅 下高田



⑭ カタクチ 藤井照治宅 下高田



⑮ テツピン 藤井照治宅 下高田



⑯ 豆腐の型 藤井照治宅 下高田





⑮ チョウシ 藤井照治宅 下高田



⑯ テツピン 藤井照治宅 下高田



⑰ トックリ  
藤井照治宅 下高田



⑱ サラ 藤井照治宅 下高田



⑲ サラ 藤井照治宅 下高田



⑳ トックリ  
藤井照治家  
下高田



㉑ トックリ  
藤井照治宅 下高田



㉒ 盃台・盃 藤井照治宅 下高田



㊦ トックリ  
佐藤好風宅 下高田



㊧ トックリ  
藤井照治家 下高田



㊨ トックリ  
藤井照治宅 下高田



㊩ トックリ  
藤井照治家 下高田



㊪ トックリ  
藤井照治家 下高田



㊫ トックリ  
藤井照治家 下高田



㊬ トックリ  
藤井照治宅 下高田



㊭ トックリ 佐藤好風宅 下高田



㊮㊯ トックリ 藤井照治宅 下高田



㊦ コナオケ  
佐藤好風宅 下高田



㊧ 酒ビン  
佐藤好風宅 下高田



㊨ トックリ  
佐藤好風宅 下高田



㊩ イシウス  
佐藤好風宅 下高田



㊪-1 酒ビンの底  
佐藤好風宅 下高田



㊪-2  
コナオケの蓋裏の墨書銘  
佐藤好風宅 下高田



㊪-1  
コナオケの底裏の墨書銘  
佐藤好風宅 下高田



㊫ イシウス  
佐藤好風家 下高田

(二) 灯 火 具



㉔ ヒキワリトオシ 藤井侃宅 中里



㉕ キバチ 佐藤好風宅 下高田

アンドン ランプが照明の主役であった明治から大正にかけての頃でも、アンドンは夜の作業の補助照明として欠かせないものだった。女衆ならお針仕事、男衆ならヨナベの縄ないやソウリ作りの仕事にそばに置いて灯りとしたものだという。アンドンの中のトウゲエ(油皿)には菜種油を入れ、山吹きやトウスミの芯を使っていた。かつては、トウスミキリという商売もあり、トウスミの木の芯をとって歩いていた。

高——八二・四センチ、幅——二八・七センチ、奥行——二八・七センチ

シヨクグダイ シヨクグダイは室内灯火具で蠟燭を立てて照明とする。明治以後、ランプが普及し、大正に入ってから電気による照明が行なわれるようになる。シヨクグダイの使用範囲もかなり限定された。下高田



㉖ アンドン 掛川満弥宅 菅原

でも大正時代には電気が入ったようであり、㉗のシヨクグダイも葬儀の際の仏前で使われた程度だったという。㉗は真鍮製、㉘は木製である。シヨクグダイ ① 高——六六・五センチ 台座径——二八センチ 受皿径——一四センチ  
シヨクグダイ ② 高——四八センチ 台座径——二二センチ 台座横——一九・五センチ 受皿径——六センチ  
ランプ ③はホヤとカサの欠けた吊ランプである。かつての室内照明の中心的存在だったが、昭和に入ると養蚕に使われたくらいだった。養蚕では、昭和の初めにランプ飼いという稚蚕飼育が流行し、この間の温度調節に用いられた。みかん箱に砂を入れその中に立てたり、鴨居に釘を打ちこれにぶら下げたりした。一晩でホヤが煤で真っ黒くなるため、毎日掃除して火災の予防や照明度を保っておかなければならなかった。

全高——四六センチ 全幅——三一センチ ランプ本体高——三六センチ ランプ本体幅——一一センチ

(三) その他

木箱 冠婚葬祭用の茶飲み茶碗を入れておくのに用いたというが、当初は何に使用したものかわからない。箱の内側には墨の跡がいたるところにみられ、落し蓋を支える横木が縁から三センチのところに設けられている。書類の収納用の文箱として用いたのかも知れない。一見変哲もない木箱であるが、竹釘が使用され、その後の修理の際には鉄の角釘が用いられていて材も古い。また、底裏には「文政三年 下高田村」の墨書銘がみえる。

縦——二六・一センチ 横——三九・五センチ 深——一九・八センチ

ヤタテ 携帯用筆記用具で、墨壺に筆を納める柄を取り付けたもの。真鍮製。佐藤氏の曾祖父丑五郎氏が地租改正の際の測量で図面を作業した時に使用したものである。佐藤家には現在もこの時の切絵図が多数残られて残されている。

長——二一センチ 墨壺径——三・七センチ 墨壺深——二・六センチ

ネツケ・インロウ 牙角製の三重のインロウで、葉を入れ腰にぶら



⑦ ショクダイ  
佐藤好風宅 下高田



⑧ ショクダイ  
佐藤好風宅 下高田



⑨ ランプ  
佐藤好風宅 下高田

下げる。表面に黒漆を塗る。ネツケも牙角製で、人物が龜を背負う姿を彫刻してある。

インロウ 高——六・一センチ 長径——六・四センチ 短径——二・五センチ

アンカ 移動用の暖房具で、土製の箱框に素焼きの火容を入れ炭火で暖をとった。火容に堅炭を利用すれば一日二回炭継ぎするだけで一日保てた。電気ゴタツが普及するまでは、これに格子のゴタツヤグラを被せ、ゴタツ蒲団をかけて畳の上で置きゴタツとして用いた。また、イザリバタで機織りにかけて時代には、これを腰元に置いて手をあたためながら作業したという。

幅——二四センチ 奥行——二三・五センチ 高——二五・八センチ (火容径——一七センチ 深——九・五センチ)

サントク ユルリや火鉢あるいは箱火鉢の灰の上に置いてテツピンをかけておくのに用いられる。サントクといいゴトクとはいわない。鉄輪に三脚をつけた鉄製のサントクで、波形の渡鉄は餅や小魚を焼くためのもので、自在に開閉ができる。

直径——一四・五センチ 高——一一センチ  
カギダケ 妙義町では、ユルリの残っている家はほとんど無いが、

かつてはこの家でもユルリに天井からカギダケが下がり、サントクが置かれ、テツピンの湯などはいつでも使えるようになっていた。⑥も藤井家が昭和五十年頃に母屋の改築を行なうまで使われていたもので、鉤棒や吊り棒には煤がそのままついていて、当時のおもかげがよく残っている。鉤棒の長さを調節する部分は、鯉を形どった桑の木が使われるという。カギダケはテツピンをかけて湯を沸かし、またナベをかけて炊事にも利用された。馬のいた時代には、馬にくれる米のどぎ汁をナベに入れてよく煮たものだという。

高——一五六・五センチ

ゼニバコ 金銭を入れる松製の木箱で、中央の穴から入れられた銭は、錠をはずし上蓋の半分をとりはずして取り出す。商家ではよくみかけられるが、藤井家も明治頃までは酒屋を経営しており、その頃に用いられたものであろう。ゼニバコも手提金庫の登場によって次第に使われなくなった。

高——一六センチ 幅——一五・五センチ 奥行——二七センチ

ゲタ いずれも桐製の台部に畳表をとりつけたゴザウチゲタで、中央が男性用、両端が女性用。結婚式や特別の御祝事がある時に江戸樓や紋付・袴を着てはいた程度でふだんは使わない。三足とも一木づくりのコマガタであるが左端の踵の丸い歯のゲタのことはアトマルという。

(右) 長——二一・八センチ 幅——九・四センチ 高——四・八センチ

(中央) 長——二三・三センチ 幅——九・二センチ 高——四センチ

(左) 長——二一・六センチ 幅——九・三センチ 高——四・二センチ

クシ、コウガイ、カンザシ 鬘甲製の髪飾りで、大正時代の嫁入衣裳のひとつであったという。⑦は、婚約をとりかわす結納の際に、雙方

から届けられた髪飾具一式で、長い間蔵の中で保存されてきた。



⑥-1 木箱  
佐藤好風宅 下高田



⑥ キバコ 佐藤好風宅 下高田



⑦ ヤタテ 佐藤好風宅 下高田



⑬ アンカ 藤井照治宅 下高田



⑭ ネットケとインロウ  
掛川彌弥宅 菅原



⑮ ゼニバコ 藤井侃宅 中里



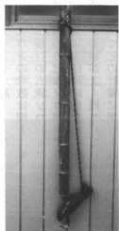
⑯ サントク 藤井昭治宅 下高田



⑰ ゲタ 藤井照治宅 下高田



⑱ クシ・コウガイ・カンザシ  
藤井照治宅 下高田



⑲ カギダケ  
藤井侃宅 中里

### 三、その他

#### (一) 計量・計測具

トマス トマスは穀物を俵詰めする際の計量具で、トカキボウで繰より盛り上がった分の量を落し正味一斗に平均にならず。

㊦は明治以降の穀物検査が行なわれる以前からのトマスで、地元の桶屋で作ってもらったといわれるトオケである。

㊧は規格品の製品を購入したもので、トカキボウには「群馬県」の合格の焼印がおされている。縁に鉄をまわしているところからカナバンのトマスと呼ばれた。

トマス<sup>㊦</sup> 直径—三一・八センチ 深—二八・八センチ

トマス<sup>㊧</sup> 直径—三二センチ 深—三〇・五センチ

トカキボウ 直径—六センチ 長—三八・七センチ

トマス 角形の一斗枡。小幡藩の年貢米を計るのに村中を回ったマスであるといわれ、底裏に元文の銘があったが煤で分らなくなつたという。度量衡の検査があつた折に役場に提出したが不合格となり、縁をノコギリで切られてしまつたが、昭和二十七年頃に丸いトマスを購入するまでは修理して使ってきたという。その後、諸戸の宮大工に恵比須・大黒の容れ物に作りかえてもらった。

縦—三六センチ 横—三六センチ 深—二六・四センチ

一合マス 酒などの液体状のものを計量する一合マス。しかし、液用に用いたことはなく、米や小豆などの穀物用に使ってきたという。

春ギトウや天神講などの寄合のある時には、各戸で一口二合なり三合という形で米や小豆を集めたが、そうした時にはよくこのマスを用いたという。マスの四面に「液用 一合」、「四」の他「羣馬製」の焼印がみえる。

縦—八・五センチ 横—八・五センチ 深—五・五センチ  
サオバカリ<sup>㊨</sup>は秤の長さ一九九センチの特に大型の秤秤であるが、これをテンピンと呼んでいた。俵や吠などの通常のハカリでは計れない重量物の計量に用いられ、使用する際には少なくとも三人は必要だった。力の加わる部分は銅板が巻かれて補強され、秤を吊す繩には中繩の麻繩が使われている。

㊩は日常用いられた秤秤である。秤の末端が欠けているが、二貫目まで計れる。小型のハカリだが小物を計るにはこれで充分間に合った。分銅は真鍮製で「カナガワ<sup>㊪</sup>世42 四四六七」と刻印されている。皮袋の収納ケースには「神奈川<sup>㊫</sup>製」とあり神奈川県で製作されたことが分る。

サオバカリ<sup>㊬</sup> 長—一九九センチ 直径—四・七センチ

サオバカリ<sup>㊭</sup> 長—三十センチ 直径—〇・七センチ

分銅 直径—三・六センチ 高—三・八センチ

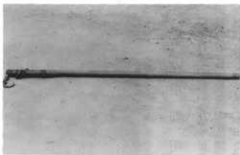
ハカリタマ 秤秤の錘として用いられた石製のハカリタマ。錘には鉄製・真鍮製の他にこうした石製の前近代的なものもあった。掛川家でもこれを使って計量したことはないというからかなり以前のものである。米俵などを計つたものであろう。

直径—一四・五センチ 高—一四・八センチ

ソロバン ソロバンの珠数は梁上二珠、梁下五珠の七珠ソロバンから六珠ソロバン、現行の五珠ソロバンへと変ってきた。㊮は珠がなくなっているが、箱形の七珠ソロバンであり、古い型を示す大型ソロバンである。佐藤家は、江戸時代には村役人を勤めており、小幡藩より拝領の膳の他、古資料がよく残されている。このソロバンなども年貢米上納の際の米俵などの計算に用いられたのかも知れない。ソロバンの底には「重士号」の墨書がみえる。

幅—六〇・二センチ 奥行—一四・八センチ 高—四・三センチ





③ 秤杆 佐藤好風宅 下高田



⑦ トマス 藤井照治宅 下高田



④ 秤秤・分銅・秤入れ 佐藤好風宅 下高田



⑧ トマス 藤井照治宅 下高田



⑤ ハカリダマ  
掛川満弥宅 菅原



⑩ トマス 掛川満弥宅 菅原

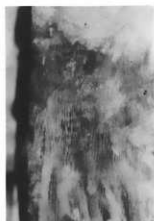


⑥ ソロバン 佐藤好風宅 下高田



⑫ 一合枡 竹田幸義宅 菅原

## (二) 信仰用具



⑥—1  
ソロバン底板の墨書銘  
佐藤好風宅 下高田

鉦 葬式の晩の念仏や日を決めて行なう女衆の念仏講で用いられた銅製の摺鉦である。念仏講も佐藤氏の祖母の代までであり、次代に引き継がれることはなかった。念仏講の当日にはよくこの鉦を持って出かけ、これを叩きながら供養の念仏を唱えたものだといふ。

直径——一〇・八センチ 高——二・七センチ

雛人形 本来は男女一対の内裏雛であったが男雛は虫食いで壊れてしまったという。冠までの高さは四五センチで座雛としては極めて大型で、衣裳もすぐれており、一般の家庭では入手が難しい雛人形であろう。由来は不詳で昔から佐藤家に伝わってきたものという。享保雛の系統を引くものであるかも知れない。三月三日の雛節供には二年に一度くらいの割合で飾ってきたという。

高(冠まで含む)——四五センチ 幅——五九センチ

絵馬 下高田の藤井家では絵馬のことをエンマと呼んでいた。馬屋の入口に絵馬を吊して馬の守護とする例は、八木連の岩井家、中里の藤井家、菅原の須貝家、掛川家などでみられたが、それらの絵馬は、菅原の陽雲寺の観音様(馬頭観音)で受けてきたが、埼玉県東松山市上岡の馬頭観音に講を組んで行った際に受けてきたものといわれる。

陽雲寺の馬頭観音は上岡の馬頭観音の御分靈といわれ、二月十九日の縁日には孟宗竹の葉や護符をいただし、寺の世話人が売る絵馬を買ってきたという。掛川家の絵馬には「上岡」と刷られた紙が貼ってあった。陽雲寺の絵馬の図柄も上岡のものと同じである。⑥は昭和三十年頃、須貝氏の父親が陽雲寺の観音様から受けてきたものという。吊す絵馬は、銅ついている馬の毛色や頭数に合わせて買ってきたという。また、馬喰などのように馬の売買を職業とす者は、複数の馬の描かれた絵馬を買ってきたという。岩井家の内馬屋には周囲の柱や板に二十枚以上の絵馬が釘で打ちこられていた。

箆——一八・二センチ 横——二一・二センチ

ハナ・ケエカキボウ・ハラミバシ・カタナ・タワラ・エンガ・キネ別図のモノツクリの日に作られた「つくりもの」は、諸戸字日向の老人クラブ(栄寿会)が、妙義町中央公民館に昭和五十七年に寄贈したものである。材料はハナがヤマタワの他はヌリデンボウ(ヌルデ)を使っている。これらは、正月六日の山入り日に材料を採取して、十二日のモノツクリで製作されたものであるが、この他にもテンガ・ウスあるいはヨツゴなどが家によって作られる。また、ハナも三段ばかりでなく五段・七段にかく家もある。

下高田の藤井家では、ハナはコメゴメの木で一本に七段かくものと、五寸ほどの木に一段かくもの、ケードのマツツケギにつける一尺ほどの長さの二本のハナがあつたという。七段のハナは正月棚と神棚の二カ所にあげ、七五三のメ縄の真中に挿した。小さいハナは屋敷神・井戸神・蔵の神・便所の神・墓地の石塔の他、馬屋の前やテントウバシラにもあげたという。また、正月十二日頃にはよくハナ売りが回ってきたという。

カタナは、大と小の二本を作り、小刀は近くの道祖神の石塔にあげる。大刀はドンドン焼きの火で焼いてこがし、刀に焼きを入れるという意味で川の水に浸した後、家に持って帰りトポロの上にあけておく

とヨウジンボウになった。ヨウジンボウは翌年のドンドン焼きで燃す。菅原の竹田家では、ハナのことをケエダレエと呼び、材料にはカズガラを用いていたという。ケエダレはハナを五段から七段にかき、これをヤマクワに挿したマイダマの前に立てかけたり、正月棚であるタカダナにあげたりした。また、五寸位のカズガラにハナを付けたものは家内外の神仏にあげたという。

同じく菅原の掛川家では、もとはカズガラを使って五十〜六十センチの長さのものに、五段かいたハナと二十センチほどのものに三段かいた二種類のハナを作ったという。五段のハナは正月様に二本進せ、三段のハナは井戸・蔵・コナシバ・馬小屋・カスト・オコウジンサマ・神棚などにあげた。カズガラは幹がやわらかいので削りやすく、ハナも賑やかにできる。今はカズを作らないので、大正ボクといわれるヌリデンボウの丸木を十字に割り、そのコバにナタでハナを削っている。

この他、ケエカキボウは十五日の朝のアズキガユを掻き回すのに用い、ハラミバシはこのカユを食べるのに用いた。ケエカキボウ・ハラミバシはその後神棚にあげておき、ナエマの水口に挿した。

ハナカキ 正月のモノツクリでハナをかくのに用いられた。今はヌリデンボウの木をナタでかくが、かつてはカズガラをハナカキでかいて作った。刃は片刃で刃の裏側を木におしあてて先端の曲った部分でかく。霜の焼印は掛川家の家印ではなく、昔から使ってきたものでどこで入手したのかは分らない。

柄長——一・二センチ 刃長——四・九センチ



㉞ 絵馬 須貝佳孝宅 菅原



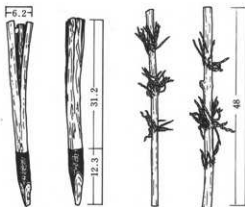
㉞ 鉢 佐藤好風宅 下高田



㉞-1 馬屋の絵馬 須貝佳孝宅 菅原



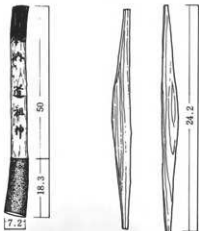
㉞ 雛人形 佐藤好風宅 下高田



① ケ-カキボウ 諸戸 ② ハナ 諸戸



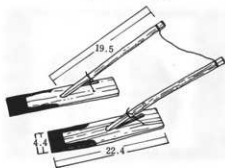
馬屋の絵馬 岩井祐平宅 八木連



③ カタナ 諸戸 ④ ハラミバシ 諸戸



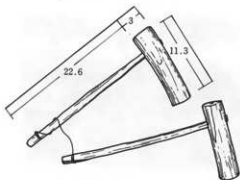
⑤ タワラ 諸戸



⑥ エンガ 諸戸



⑦ ハナカキ  
掛川満弥宅 菅原



⑧ キネ 諸戸

（三）その他

ハモ 牛を引くタズナは鼻に付けたハナカンに結ぶが、馬の場合は口にハモをハマせ、これにタズナを結んで引く。㊸は、大きい径の口にタテゴと呼ばれる縄を結んで、これを馬の首にまわしてハモを固定し、小さい径の口にタズナを取り付ける。㊹は、タテゴ用のカンがタズナ用のカンと一緒に両端にまともられた種類、㊺は皮製のバンドがタテゴの役割をする競馬用のカンで、タズナ用のカンは付かない。

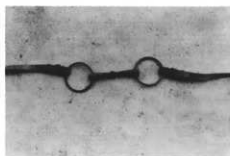
ハモ㊸ 全長—三一・二センチ カン(大)径—七・一センチ  
 カン(小)径—六・一センチ

ハモ㊹ 全長—二八・八センチ カン(大)径—六・九センチ  
 カン(小)径—五・四センチ

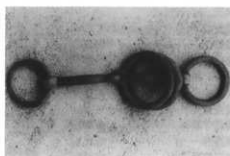
ハモ㊺ 全長(皮バンドを含む)—八七・六センチ カン径—九センチ

シタガネ 初めて使う馬は、荷を背負ったり代掻きをするなどの作業に慣れていないためあばれることが多かった。また、かつては、去勢しない雄馬も多く、これが発情期となるとあばれて手に負えなかつた。このため、そうした馬には㊻のようなシタガネを口にハマせて強制的に労働させた。シタガネは、麻縄を結んで馬の首にかけ、これを馬の口にハマせてもう一本の麻縄をカンに付いた偏平な輪金に結んで、馬の腹帯に取り付けたものである。こうすると馬は首をあげるこ

とができずおとなしくいうことをきいた。  
 カン径—一一・七センチ 輪金長—一〇センチ 輪金幅—二・五センチ



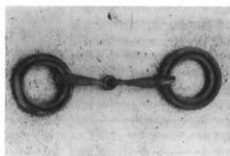
㊸ ハモ 掛川満弥宅 菅原



㊹ ハモ 掛川満弥宅 菅原



㊻ シタガネ 掛川満弥宅 菅原



㊺ ハモ 掛川満弥宅 菅原

ヤマトブキ	6, 46, 47	嫁の年始	252	わらじがけ	19
山人参	177	ヨモギ	245, 267, 268	わら仕事	62
	10, 13, 14, 125	寄合	98, 115	ワラジセン	130
山の神	130, 131, 132, 180	ヨリアイ山	101	ワラジヌギ	122
	244, 252, 254, 255	ヨリツキ	49, 50, 313	ワラソウリ	44, 237
山はじめ	62	ヨロク	119, 120	わらたき石	53
山開き	245			わらでっぽう	285, 286
		ら		わら宮	120
ゆ		ランプ	53, 336	わりめし	21, 23
結納	227, 228	ランプ飼い	336	蕨餅	40
夕エビス	286			わりご(メンバ)	291
夕立	181	り			
湯灌	234, 309, 311	リクテン	73		
雪かき	89	竜柱	44, 45		
雪降り祝	264	輪番制	98		
ユズ湯	289	隣保班	97, 98		
ユツケ帯	271				
ユツケソウリ	88	る			
ゆでまんじゅう	272	ルスンギョウ	134, 258		
指使い	186				
ユベシ	289	れ			
弓張り提灯	278, 280	恋愛結婚	226		
百合若大臣	243	連子窓	306		
エルリ	306, 307, 308, 310	連絡員	94, 98, 100		
	313, 323, 330, 337				
		ろ			
よ		ロウソク	217		
夜遊び	119, 226	六角塔婆	239		
宵祭り	284	六月いも	26		
糞蚕	7, 18, 74, 90, 237	六三除け	177, 219		
糞蚕祈願	56	六尺禪	119		
糞蚕組合	99, 100	六文銭	237		
糞蚕社	75	ロジ(ツボ庭)	288, 289		
糞蚕守護神	266	炉の火	238		
糞蚕神	7, 81				
糞蚕農家	312	わ			
糞子	116, 117	わかいしゅ	106, 116, 118, 119		
ヨウジンボウ	343		135, 215, 264, 267		
用水	67	若水	115, 249		
用水堀	7	若宮八幡	10, 11, 133		
ヨコザ	7, 51		217, 247, 288		
ヨコビキノコ	324	若餅	244, 257, 258, 260		
ヨセ太鼓	105	ワカレ塔婆	133, 240, 241		
ヨタレ	131	ワキザシ	132, 135, 259		
四日八日	175	ワキ奉願	166		
ヨツゴ	342	ワタクリ	327		
夜泣き	179, 224	ワタリゲエ	6, 48		
ヨナベ	5, 18, 61, 119, 336	ワマシ	52		
嫁入道具送り	228	わら細工	286		
嫁御のお土産	232	わらじ	18, 19, 285		

## む

六日年	13, 243, 252
無縁仏	14, 178, 246, 275 276, 277, 280
迎え一見	228
迎え火	278
迎え盆	277, 278
麦ウネ	317
麦落し	69
ムギトオシ	321
麦のなべ初め	35
むぎばな	23, 40
麦バナヤキモチ	32
麦ぶち	39, 320
麦ぶち台	70
麦ぶち棒	69
麦まき	69, 130
ムギ蒔き土用	68
麦飯	22, 253
ムギヤギリ	22, 70, 320
婿イチゲン	228
むこう組	110
ムシ(方言)	301
虫切り鎌	128
虫干し	271
虫よけ	259, 272
ムシリザカナ	231, 330
無尽	113
娘の見置き	299
棟上げ	18, 34, 43, 44, 45, 120
棟上餅	34
村勘定	137
村境	96, 105, 270, 271
ムラ中	234
ムラ組織	3, 9
村人足	9, 89
ムラの休日	103
村八分	106
ムラ祭り	115
村役	104
め	
メイトブキ	46
命名	221
メグル	65
メケエ	188
襦 袴	327
メシツギ	329
メタメタ(方言)	301

メツバ	177
メド飼い	75, 90
メドつみ	78
メドバン	78
目の神様	140
メハジキ	216, 236, 237, 239
メンコ	211
めん箱	30
メンバ板	135
	131, 175, 220
メンバ	249, 250, 255 273, 292, 329

## も

燃エクジ	244, 258, 259
最上口説	199
モクヨケ	234, 235
もぐら退治	285, 286
モグラブセ	286
モジ(蚕網)	76
餅をつく日	34
餅つき(年末)	290
餅投げ	126, 165, 170, 172, 173
モッコフンドシ	18
モト組	110, 111
ものぐさ飼い	76
	135, 243, 252, 254 255, 256, 257, 260 342, 343
モノビ	31
喪服	20
初摺白	310
初種	65
モヤイ	7, 62
モロミ樽	37
門前町	87
モンベ	17

## や

山羊	85
ヤキカガシ	263
焼き畑	57
八木節	196, 285
焼徳	69
	6, 31, 32, 38, 42
やきもち	60, 66, 82, 241, 247 271, 290, 329
ヤキモチツコ	117
ヤキモチヤキ	300
厄落し	215, 258
薬師様	140, 178

葉草	176, 177
厄年	225, 258, 261
厄年つ子	224, 225
厄病神	270
夜具布団	5
厄除け	136, 271
厄除け観音	140
ヤケド	176, 178
屋号	116, 123
屋敷	40
屋敷稲荷	228, 289
	10, 11, 13, 41, 120, 125
屋敷神	132, 133, 217, 262 287, 288, 342
屋敷祭	120, 133, 134, 247 254, 287, 289
ヤシヤゴ	117
休み餅	34, 63, 81
安宿屋	93
ヤセウマ	134, 267
屋台	97, 135, 199
ヤタテ	337
ヤツレ	270
ヤツ(地形)	300
ヤツ田	64, 67
	104, 107, 122, 128, 130
ヤド	131, 138, 142, 143, 144 213, 255, 264, 265
ヤットコセー	300
屋根板	46
屋根替え	122
屋根替餅	34
屋根職人	6, 17
屋根葺き	46, 112
屋根普請	17
屋根棟	239
屋根屋	46, 85
夜番	226
ヤブ入り	261
ヤマイモ	250
山入り	13, 131, 132, 252, 342
山祝い	62, 132
山うなぎ	89
山男	298
ヤマカガシ	35
山伐り	53, 73
山桑	34, 57, 252, 256 257, 342, 343
山沢ざらい	7, 137
山仕事	131, 132, 255, 257
優健命	126

ボヤ小屋	85	ません棒	83	三島様	69
ボヤムシ	78	またこい茶	231	水借り	137
ボロ肥	58	町家	308	ミズガメ	329
ボロ草履	5	松井田買い物	273	水切り	67
ボロボロマキ	59	松飾り	259	水こり	296
本組(ほんぐみ)	99	マツチ(土質)	57	水沢観音	219
本家	123, 133	マツバイブシ	13	水ツキ田	310
ホンジメ	49	松迎え	289, 291	ミズノミダング	36
本膳	261	祭世話人	98, 99, 100, 101	水番	7, 55, 66, 67
ボンデン	105, 138, 270	間取り	49	水虫	179
本分家	121	マナ板	253	味噌	6, 36
本分家のつきあい	122	マブシ	56, 106, 244, 257	ミソコシ	324
盆	14	まぶし各種	79, 80	味噌漬	25
盆送り	281	ママ	300	味噌漬	26
盆踊り唄	196	マミ(田の四隅)	318	ミソハギ	275, 278
盆買い物	273	まわし	18, 182	みそまんじゅう	33
盆魚	14, 246, 279	マムシ酒	177	味噌やき	32
盆供	277	マムシよけ	63	道饗祭	11, 95, 105, 136, 138
盆暮動定	90	豆がら	262	道刈り	273
盆ごご	246, 275, 276	豆木	250, 263	道こしらえ	104, 109
盆棚	246, 274, 275, 276 277, 278, 281	豆ぞ小僧	93	道シメ	271
盆提灯	246, 279, 280, 281	マメダマ	79	道普請	92, 98, 100, 102
盆月の死者	280	豆まき	262	ミチワスレグサ	300
盆の食事	279	魔物よけ	233	三月がかり	174
盆の野回り	280	藪	80	密教具	12
盆花	273, 274, 276, 277, 281	藪買い	91	冥づくり	86
盆迎え	274	まゆかき	80, 261	ミツメ	257
ま		マユタテ	80	見とどけ	230, 231
埋葬	237	魔よけ	42, 179, 221, 244, 255 256, 257, 259, 263	ミナガワ	62, 66
	33, 34, 53, 65, 82	まりのき	211	水口	65, 255
	244, 245, 247, 252, 253	まりつき唄	200	皆さん振舞	112
マイダマ	256, 257, 258, 259, 260 261, 262, 263, 266, 268 283, 286, 343	マルツトオシ	321	みの	66
マイダマの木	132	マルメ年	244, 251, 256, 257	美濃つ子	224
マイデ	309	まわり桑	78	耳だれ	178
前売型民家	48	回り競馬	212	耳おさぎ	241, 247
マキダワラ	285	まわり馬場	317	ミヤコバシラ	53, 315
マキヤマ	73	マワリブチ	10, 95, 114	岩番	97, 138
枕がえ	233	マンガ	262	宮語り	112
枕がえし	216	まんがあらい	66	妙義講	10, 87, 125, 127
枕ごぼう	175	万石	33, 317, 321	妙義権現	2
枕団子	233, 234	万才	93, 185, 251, 266	妙義信仰	125
枕飯	233, 234	万灯	285		2, 64, 75, 81, 87, 99
マクリ	223	マンボウ	80	妙義神社	100, 102, 110, 126 127, 137, 139, 187 224, 267, 271, 314
マケ	122, 142	み		妙義の天狗	57
曲物	329	箕	6, 43, 44, 45, 247 283, 284, 286, 315, 321	妙義詣り	127, 224
馬子	298	ミカン彫り	73, 290	ミヨリガエシ	85, 88, 301
マサ板	46	ミゴ	327		



ヒイログチ	300	拍子木	226	フندگان	52
稗	6, 23, 68	日備とり	62	フンドシ	219
ヒエボリ	65, 66	ヒヨメキ(頭のみぞおち)	300	フンドシゼニ	119
ヒエモロコシ	6, 23, 290	ヒラボシ	67	へ	
火神様	258	ヒルバリ	86	米作	58
彼岸	26, 53, 175, 242, 245, 315	ヒルベタイ	29, 276, 279, 284	ヘソクリ	118, 119, 120
彼岸切り	78	拾い親	124, 224	ヘソノ	220
彼岸の食事	284	黄乏徳利	330	別火	12, 38, 215, 216
ひき白	331	ふ		ベッタラマキ	59
ひきがえる	182	フカシドウ	257	ヘッツイ	7, 24, 50, 52, 134, 257
ヒキワリ	6, 21, 23, 32, 329, 331	ふかしまんじゅう	271, 272, 283	ヘッピリ関(世間話)	298
ヒキワリドウシ	23, 331	吹竹	54, 225	ベニバチ	30
ピク	106, 327	葺き番	113	ヘビガマ様	136
ヒゲン様	56, 134	吹き抜け	306, 307	蛇・ムカデ除け	258
ヒザノバシ	228, 232	福俵	252, 255	ヘヤ	49, 50, 306, 307, 311
肘掛窓	314	フクチ	167, 171	弁慶橋	298
ひし餅	265	フゲンサマ	52, 53	便所	49
ひしゃく	283	フゴ	77	便所神	342
ビション醬	91	伏見神社	127, 137	弁天池	296
左勝手(左ズマイ)	175	藤原時平	295	ほ	
左縄	275	普請	42, 122	ホイロ	331
ヒチジョウケン	167	フスマ	32, 88	法印屋敷	173
ヒツジダング	35, 247, 287	二つ岩	10, 12, 127, 136, 215, 224	奉願(法眼)	106, 142, 166, 167, 170, 171, 172
ヒチンボサツ	244, 258	二人呼び	111	泡盛	178
ヒトガタ	105, 127	ふだん着	19	ほうそう神送り	136, 224
ヒトケタ(苗代)	65	ブッソロイ	185	奉納道祖神	258
ヒトケダ(一毛田)	64	不動様	139, 267, 294	ボウヤ	92, 317
人魂	138, 233	フナ餅	81	ホウロク	32, 54, 262, 263
ヒトツヤキモチ	31	フネ(醤油しぼり)	37	ホオヅキ	275, 276
ヒト(鳥)	302	フマ(葬式)	187	ホオリマンガ	318, 319
一七日	233, 238, 239	フミクサ	60	ホクイ	22
火トボシ	247	ブヨ	176	ホケエ	34, 43, 44, 45, 329
ヒドロッタ	64	ブラク	94, 95, 98, 102, 103, 122, 131	干草	307
ヒナ市	266	フリコミ	186	ホシザカナ	36
ヒナタガケ	56	振り米	23	星名	300
ヒナタ味噌	6	フリダシの宿	185	保存食品	37
ヒナ人形	265, 342	フルイ	60, 177, 178, 321, 331, 332	ボタ餅	266
ヒナ祭	265	篩屋	22	墓地	122, 241, 342
火の玉	298	振舞	111, 112, 113	ポッチまき	59, 69
ヒビ	176	フレ	137	ホド	32, 52, 258
火伏せの神	130	フレゴト	105	仏の足洗い水	246, 278
火戻しの法	127	フロシキヨメゴ	20	仏のたたり	176
百軒着物	224	フンガケ	52	ほととぎす	179, 293
百姓仕事	299	分家	98, 116	ホドヤキ	32
百姓の神様	108, 109	粉食	29	ホーベイ	234
百足祝	63			ホマチ	119
百日咳	178, 224			ボヤコセエ	323
百本旗	136				
ヒヤ汁	25				
ひょう	181				

年始回り	250
ネンネコ	17
年番	100, 104, 105, 131 264, 265, 269
念仏(組)	9, 95, 106, 125, 140 142, 143, 238, 242, 266
念仏玉	238

の

農家遺情	306
農閑期	90
農耕慰安	63
農事組合	99, 100
農事暦	56
	13, 57, 63, 68, 92, 101
農休み	103, 105, 136, 138 246, 269, 329
農休みがら	131, 138, 269, 270
農休みまんじゅう	32, 35
農友会	106
ノギ	68
ノコギリ	324
ノコギリガマ	323
製斗買	90, 91
のし餅	290
ノゾッコミ	80
ノゾッコミ酒	231
ノッポ土	57
咽喉のケガ	176
野辺送り	44
ノボリ旗	267, 268
ノラオーサキ	139
のら着	19
野良の食事	38
ノリ仕事	7, 62
ノンビバン	60

は

ハイオイ	247, 289
ハイカドリ(糞蛋)	76
鑑酌人	330
歯痛	176
灰焼き	59
化かされた話	298
墓掃除	273
ハガタメ	250
ハカナオシ	237
袴返し	227
バカ水	300
はかり売り	91
ハカリダマ	340

掃立	75, 81
萩の箸	247
履き物	18
馬具	83
白雲山	2
白蛇の神	284
馬喰	81, 84, 342
ハゲン様	57, 66, 136, 269
箱膳	39, 88, 223
波己曾神	2, 125, 126, 127 128, 187, 262, 267
ハコソ様	222
箱火鉢	337
ハサミコミ	6
はしか	178
橋架け	8, 88
橋掛け人足	89
橋木	89, 102
橋くぐり	127, 137, 224
橋普請	102
橋参り	136
ハゼ	67
裸でバラしよう	115, 296, 299
畑の広さ	181
畑の手入れ	299
旅籠	90
旗本領	2, 3
八十八夜	267
ハチナデ	248, 292
八分カゴ	327
初市	90, 251
初午	34, 104, 132, 212 245, 247, 263
初絵	93, 250, 251
二十日正月	261
初雷	179, 262, 263
はっさく	247, 283
初節供	11, 223, 268
初誕生	111, 124, 215
ハッタンドリ	67, 318
八丁ジメ	11, 246, 270, 271, 290
初荷	251
ハツホ	51
初参り	250
ハツミズ	167
初夢	251
馬頭観音	140, 265, 342
ハナ	170, 172, 255, 256 257, 342, 343
ハナカキ	3, 34, 260

ハナカゴ	236
ハナカン	345
斬屋	92
鼻付鉈	324
花つくり	185
ハナドリ	65, 82, 318
ハナムスビ	52
羽根ジシ	187
羽根つき唄	200, 211
ハネツルベ	41
はね橋	88
ハマイ	80
ハモ	345
はやり目	178
ハヨ	27
ハヨナワ	262, 318
ハヨブチ	262
腹帯	219
ハラミ箸	65, 252, 255, 256, 257 260, 261, 342, 343
ハリキン	12, 118, 216, 239, 240
針供養	263
ハルカイ	9, 98, 104
春祈禱	100, 103, 104, 128 245, 264, 340
春駒	93, 213, 251
ハルタ	64
株名山	129, 137
株名神社	179
春彼岸	266
春祭り	266
ハンカゴ	327
ハンギリ	59, 69, 172
半夏生	269
半ゴロン	266
半身上	82
パンジョウ	310
パンソウ	84
パンダイ餅	6, 35
半てん	17
パンミズ	168
半飯	22, 331
半わけ	55, 61

ひ

ヒアガリ	38, 215, 222
ヒアケ	12, 216, 240
ビー玉	211
ヒイニイリ	61
ヒイラギ	263

トコ .....307, 309, 313  
 床上げ .....222  
 トコノマ .....49, 53  
 年祝 .....225  
 年男 .....115, 243, 249  
                   250, 262, 307  
 年神 .....248  
 年神様 .....77, 115, 249, 253  
                   257, 264, 291  
 年神棚 .....13, 248, 251, 291  
 ドジョウ .....28  
 土蔵の神 .....135  
 年取り .....252, 290, 291, 292  
 トタンブキ .....309, 313  
 トチカン .....60  
 トックリ .....330  
 独結 .....295  
 土手 .....58  
 ドテ飼い .....76, 327  
 ドドメ .....77  
 隣組 .....94, 95, 97, 98, 99, 100  
 とのさ節 .....185, 199  
 賭博 .....212  
 とびうま .....212  
 ドブロク .....37  
 トボ(ウ)グチ .....229, 247, 263  
                   280, 342  
 トマス .....317, 321, 340  
 土室育 .....75  
 土用丑の日 .....177  
 土用のこ .....78  
 土用味噌 .....6, 36  
 トリアゲバア .....219  
 鳥追い .....11, 259  
 トリスズメ .....84  
 酉の日 .....247, 288  
 トリスズメ .....231  
 トロロ .....307  
                   13, 51, 82, 130  
 ドンド(ン)焼 .....134, 135, 244  
                   247, 257, 258  
                   259, 342, 343  
 トントンブキ .....46, 309  
 トンビノハネ .....227  
 トンヤダテ .....67  
 呑竜様 .....224  
  
 な  
 苗代 .....65, 260, 261  
 苗の厄日 .....68  
 ナエバ .....68

苗運び .....66  
 ナエマ .....343  
 ナエマグサ .....55, 65  
 苗間づくり .....129  
 中祝い .....62  
 仲買人 .....80  
 ナカザ .....130  
 ナカシロ .....318  
 ナカデエ .....312  
 ナカド(座敷) .....229, 246, 278  
 中之嶽講 .....129  
 中之岳神社 .....173  
 ナカノマ .....311  
 仲間入り .....232, 241  
 流れ灌頂 .....225  
 投げ餅 .....43, 44, 45, 120, 174  
 仲人 .....226, 227, 228, 231  
 仲人親 .....124  
 仲人との別れ .....12, 215, 223  
 仲人礼 .....227  
 ナスの馬 .....278, 281  
 なぞ .....300  
 ナタガマ .....323  
 名付け親 .....124  
 夏やせ .....178  
 七草ガユ .....253  
 セグート(地名) .....300  
 七つ坊主 .....224  
 七つまんじゅう .....272, 273  
 七波己曾 .....126  
 浪花節語り .....74  
 名主 .....114  
 葉っぱめし .....24  
 名ピロメ .....232  
 ナベカシゴフコウ .....12, 239  
 鍋めし .....24  
 ナマグサ .....279  
 ナメミソ .....6, 36  
 鳴沢不動尊 .....296  
 なわとび .....210  
 縄ない .....174  
 縄ない機 .....226  
 縄ブチ .....261  
 南蛇井 .....299  
 ナンド .....115, 219, 307, 309  
  
 に  
 二階廊下 .....310  
 ニギリダンゴ .....287  
 煮こみ .....29

二歳子 .....178  
 煮シメ .....35  
 二十三夜 .....144  
 二十二夜様 .....142, 144, 217, 218  
 二十二夜信仰 .....214  
 二十六夜 .....144  
 日食 .....315  
 ニナワグチ .....62  
 二年詣り .....250  
 二番契約 .....103  
 二百十日 .....67, 283  
 二夜様 .....219  
 入家式 .....229  
 乳児の歯 .....224  
 女人講 .....110, 143  
 ニワバ .....9, 98, 100, 106  
                   111, 234, 235  
 人形遊び .....211  
 人形芝居 .....213  
 妊娠禁忌 .....217  
  
 ぬ  
 ヌイマモリ .....224  
 賀前神社 .....81, 100, 129  
 ヌクベエ .....32  
                   252, 255, 257  
 ヌリデンボウ .....259, 260, 342  
                   343  
  
 ね  
 ネエバワラ .....65, 175  
 ネエラ .....82  
 ネクワ .....78  
 猫 .....23, 182, 186  
 ネコ編み .....63  
 猫神様 .....136  
 ネコノシippo .....117  
 猫の墓 .....136  
 ねっこ大尽 .....123  
 寝小便 .....176  
 ネズップサゲ .....63, 247, 287  
 ねずみ .....136  
 ネズミヒキ .....119  
 ねっ釘 .....212  
 ネッケ .....337  
 熱病 .....176  
 ネプタ .....272  
 ネリ肥 .....7, 58, 59  
 年忌 .....110, 240  
 年買米 .....340

樽入れ	227, 228
タレオケ	69
タレ時き	69
タワラ	252, 255, 256, 257, 342
俵ころがし	213, 251
男根	260, 267
誕生祝	223
誕生餅	34, 223
タンスヨメゴ	20
段とび	210
ダンナ(水行)	168
旦那呼び	112
ち	
チガヤ	246, 274, 275, 276, 282
力米	112
力餅	43
力持ち(世間話)	298
力わざ(娯楽)	212
地ぎょう唄	199
乳兄弟	124
デゴロ	60
稚蚕飼育	336
乳親	124
チッカ(遊戯)	211
地づき唄	43
茶釜	330
茶壺	331
チャノマ	309
中気	178
中行	170
中宿	228, 229
チョイチョイ漬	25
チョウシ	330, 331
長清法師	2
チョーナ仕上げ	300, 313
帳場	98, 111
帳ふち	40
帳面買い	90
ちょぼくれ	185, 199
チョンマゲ	20
チング	224
つ	
つきあい	110
月占い	179
ツキヌキ沢	297
月待	11
ツクリモノ(葬式)	234
ツクリモノ(小正月)	255

ツゲ	9, 106, 111, 234, 235, 236
ツケギ	53
漬物	25
ツジウダンゴ	14, 35, 53 247, 287
土入れ	69
土ボウロク	217
ツトッコ	270
ツナミ	180, 300
ツボ庭	134
ツミッコ	30
ツムジ風	300
爪引き地藏	170, 295, 298
爪ビキ不動	141, 267
通夜	234
ツリウエ(壺)	83
ツルベ	220
ツルベ井戸	220, 329
て	
手合わせ歌	199
テイザシキ	7, 10, 50 51, 95, 115
デエ	49, 50, 219, 236, 306 307, 309, 311, 312
デガワリ	262
テッコウモリ	231
手伝い	62
テツピン	330, 337, 338
鉄砲馬場	212, 317
デハノゴハン	236
出不足	9, 104, 269
寺世話人	100, 101, 342
テラ銭	212
寺の年始	252
寺への年始	253
寺まいり	238
テンガ	131, 318, 342
電気	54
天気予報	180
天狗	128, 138, 180, 257 267, 270, 296
天狗堂	266
天狗のお能(シヤギリ)	294
天神講	10, 34, 95, 109, 110 215, 225, 265, 340
天神様	128, 295
テンテコ祭	130
テントウ菓子屋	91, 93
天道様	247

天道柱	53, 245, 266, 273 284, 315, 342
天王様	246, 269, 286
天秤	340
天秤かつぎ	210
天秤棒	91, 327, 331
と	
東叡山領	2, 3, 99
十日夜	14, 35, 247, 285, 286
トウグワ	317
トオケ	340
トウゲエ	336
峠講	129
造化万才	15, 184, 189, 195
トウシ(籬)	60
冬至	289
ドウジョウバラライ	186, 187
トウジンボ(方言)	301
トウスミキリ	336
道祖神	135, 168, 244, 253, 255 257, 258, 259, 342
道祖神ねり	244, 260
道祖神の辻	259
道祖神祭り	11, 97
トウナス	289
トウナスカブリ	171
盗難よけ	179
塔婆	284
当番	185, 186, 195 264, 282, 283
豆腐型(箱)	329
トウボウシ	7, 64
同盟者組合	89
トウモロコシ	6
道路普請	269
通り日(気象)	181
棟梁	43, 44, 45, 312
灯ろう祭	129
ドーロクジン	259
ドオッパナ	300
トカキボウ	340
戸隠神楽	188
戸隠様	129
研屋	92
毒消し売り	74, 92, 179
トクサ	20
トクセエ(方言)	301
ドクダミ	176
トグヌキ不動	141

磨墨神社	294, 317	禪の綱	14, 285	堆肥	58, 60, 106, 251
磨墨伝説	317	千歯こき	67, 320	太夫と才蔵	189
坐りビナ	223	センマイ(千歯コキ)	320	タイマツ	215, 229, 279
せ		洗料	21	大文字	267
セイコ	70	そ		代用食	26
製紙	316	葬儀のつきあい	216, 234	田植え	35, 66, 129
青年会	10, 106, 188 189, 215, 225	ソウケン	106	高田小次郎	2
セイロ	329	葬式	36, 111, 113, 142, 234, 241	高太神社	127
セエミ	76	葬式組	98	たきぎ	53
堰ざらい	67	葬式の諸役	234	托鉢	173
堰世話人	67, 100, 101, 103	葬式費用	239	竹馬	210, 211
堰普請	55, 64, 102, 103, 104 11, 95, 103, 105, 125	葬式用具	236	竹釘	337
石尊行	127, 136, 137, 138 215, 246, 270, 271	ソウズ	39	竹細工各種	86
石尊様	138	葬制	12	タケノフシ(ナナフシ)	182
石尊精進	270	双体道祖神	259	岳村	2, 3
石塔寺	2	総代	97, 100, 105	タケワリナタ	324
喰じめ	176	草履	18, 19, 63	凧あげ	211
赤飯(こわめし)	33, 174	ぞうりとり	211	ダズナ	345
赤痢	176	葬列	237	タタキ	50
石灰	55, 58, 59	足跡石	295	立白	36, 37, 39, 81, 247 256, 266, 286, 290
節供	245	俗謡	199	タチグサレ	113
節供バタラキ	269	そこまめ	178	たつみ倉	49
セッチン神	262	供え餅	290	タテツケエシ	6, 30
セッチンマイリ	12, 215, 221	ソバ	6, 30, 307	タテゴ	345
節分	104, 179, 245, 263, 264	ソバ家例	249	たてじ	43, 44, 45, 112 113, 135, 247, 288
セナカアテ	329	ソリ	60	タテドオシ	104
銭箱	338	祖霊	246	タテバ	8, 56, 82, 85, 88
蟬	271, 272	祖霊信仰	13	タテビキノコ	324
セリ	80, 91	ソロバン	340	建前	36
セリタタキ	253	た		棚鯛い	75, 327
世話人	97, 100, 135, 187 270, 284, 296	タアラッパアシ(棧俵)	136	七夕	123, 246, 315
世話番	264	代官領	2, 3	七夕雨	273
線香	279, 282, 283	大工仕事	86	七夕飾り	179, 272
千社参り	129	大黒住	257, 306, 307, 308, 315	七夕まんじゅう	35, 273
染織	21	タイコ縄	291	タネオロシ	69
センゼイモン	49	大根の年取り	286	田の草取り	67, 318
先祖供養	241	大根畑	273	頼母子講	113
先祖様	132, 257, 271, 272, 278	代参	129, 265	タバコ	39
先祖祭	10, 96, 122, 123, 125 141, 284, 289	太子講	110	煙草屋たばこ	192
洗濯	21	ダイシツケエ	14, 247, 289	ダボー	60
先達	130	大施界	172	東わけ	55, 61
千谷	296, 297	太々神楽	188, 269	タマガ彫り	73, 290
センダンゴ	267	退転	122	玉まゆ	80, 90
先端伐採	78	胎毒	176	タマンメエ	13
千人祝い	115	ガイドコ	7, 51, 82, 306, 308 310, 314, 315	魂呼び	216, 233
		大の字	137	たまり汁	30
		大八車	60, 85	ダミ	241

地藏菩薩畫驗記	2	十二講	11, 131, 132, 244, 255	ジワケ	122
シタガネ	345	十二様	10, 13, 125 131, 132, 244	シワスエビス	53
シタカリガマ	323	十二マイダマ	13, 257	ジンギ	110
シタゴ	56	十六日念仏	106, 142	シンゴ(センギョ)	210, 211
シタユルリ	7, 51	十六マイダマ	13, 257, 258	ジンゾウ様	128
七五三	225	ショイアキナイ	9, 91	神社総代	271
七段のハナ	342	ショイコ	60, 78, 329	身上まわし	115, 118, 119
七人衆	101	背負梯子	91	身上わたし	118
シチリン	327	ショイビク	329	神葬祭	237, 241
シツクメ	123	ショイン	309	新宅	120, 121
しつけ	174	ショウガ	283	シンドリ	65, 318
シッポコソバ	31	正月様	257, 262, 290, 291	新年会	250
シデモリ	172	正月標	50, 243, 249, 253 292, 342, 343	神仏分離	139
シトリ	23	正月八日の禁忌	254	神明様	128
四菜・九菜	175	ショウガ	324	親類づきあい	110, 112
死の忌	129	上州名物	114, 300	す	
死の予兆	232	精進あげ	284	水行	166, 167
芝居	213	精進水	167	炊事当番	98, 270
シバオコン	114	精進料理	35, 109	水車	21, 32, 33, 41 131, 297, 331
芝鯉馬	83, 212	桑桑育	7, 75	水車小屋	332
しびれ	178	上飯	57	水神	262
四方圓め	34, 44, 45, 172	小犬黒	315	水天宮	219
四方もち	43, 44, 45	ショウヅカジイサン	141	水道	40
シマ(田掻きの残った所)	318	上棟祝	172	ズウ拾い	77
シマイ正月	244, 251, 261, 262	上棟式	6	据え風呂	49
シマ苗	7, 68	ショウブ	245, 267, 268	スカリ	246, 272
縞蛇	182	ショウボン	13, 215, 232 245, 269	スキ	252
しみ豆腐	91	醤油	6, 37	スキオコシ	318
シメ飾り	291	醤油売り	91	杉皮葺き	324
シモダイコク	53	しょうゆ漬	26	杉の葉	274, 275, 276, 277
ジャガイモめし	24	奨励米	61	スゲエ(藁)	63
蛇宮の市	77	暑気あたり	176	ススポウキ	290
石神様	178	食事膳	174	ススリダンゴ	23
石神神社	128	ショクタイ	336	覗水	295
しゃっくり	178	食物禁忌	40	頭陀袋	170, 238
社日	175	食用植物	28	頭(腹)痛	175
尺棒	324	女郎屋	90	捨て子	224
砂利運び	182	白倉のお天狗	129	捨て塔婆	242
出棺	216, 236	シラジ	272	ストメ	85
祝儀	115, 116, 122, 124, 172	シラセ	232, 236	砂山	58
祝儀の料理	231	シリガイ	83	ス歩き	69
修験	10, 168	尻水口	66	炭焼き	73, 132
十五日粥	254, 255, 260	シリモチ	188	相摸	213
十五夜	283	ジリヤキ	6, 32	スリコギ	243, 253
出産	11	代掻き	318, 345	スリ鉢	243, 253
十三塚	130, 131	シログラ	318	ズリマンガ	318, 319
十三仏念仏	236	白ひげ様	294	スルス風邪	68
十三夜	284			スルス引き	61, 68
十七和讃	169				
シュウトミマイ	12, 216, 240				

コタン汁	255	さいとりさし	189, 190	産後の食事	214, 220
戸長	101	塞神	97	山菜	28
小当番	67, 94, 97, 100 105, 136	財布わたし	118	三三九度	230
ゴトク	330	裁縫	21	サンジツ	34
コトジマイ	287	祭文	92, 213	蚤掻	74
子供の祝い	111	祭文語り	199	33年忌	13, 217, 240, 241
子供の着物	20	サオバカリ	340	三東雨	174, 180, 380
子供の仏	276	さかさ松	296	産婆様	219
子供墓地	241	サカサ水	235	三代実録	2
コトリバアサン	220	盃	330	サンダワラ	63
粉桶	317, 331	魚屋	91	サンドイモ	71
粉餅	290	坂上田村磨	297	サントクイモ	27, 71, 337, 338
五人(軒)組	95, 110, 114	坂迎え	88	三人舞	269
こね鉢	332	サガラ	317	産の忌	225
コハゼ	237	サキガケ	317	産婦の食事	38
こぶ(呪)	179	さきやま	73	産部屋	219
ゴボツバ	266	サクタテ	57	三方荒神	134, 291
コマイカキ	43	ザグリ	23, 73, 327		136, 176, 177, 178
コマゲタ	338	酒びん	331	三本辻	182, 217, 224, 236 240, 278
こま廻し	211	サグ徳	134	サンマサワガシ	135, 261
ゴマミソアエ	31	ザゴイ(肥料)	58	産見舞	111, 221
ゴマメ	252, 253, 261	坐産	219	サンヤツキ	42
ゴマヨゴシ	32	サシアイ	81	三輪車	210
コマワリ(方言)	301	差鶴居	307	三りんぼう	43
小麦の赤飯	269	サスガリ	212		
虚無僧	93		49, 50, 306 307, 310, 312	し	
コメゴメ	252, 257, 258, 342	ザシキ		塩あん餅	223
米ぞつき	23	サシコ	5, 19	ジカマキ	65
コメノイトコ	117	ザッカキ	316, 318	シキセ	20, 301
米麦の割合	22	ザッコ	27, 83	シキビ	275
コモチ	132, 288	雑穀	21	ジギョウ	42
ゴモットモサマ	244, 267 284, 297	さつまいも	33, 70	地獄まき	69
コモ張り芝居	196	さつまめし	24	仕事始め	53, 243, 251
子守り	224	里芋	7, 57, 243, 245 250, 256, 257, 284	私財	96
子もり唄	200	里いもの品種	71	獅子	93, 127
コヤシ場	255	里芋の葉	272, 275, 276 281, 282	獅子組	185
コロ(トウネ)	84	里神楽連	188	シシ(猪)小屋	8, 73
コワリ	6, 32	里帰り	215, 232	シシ(猪)堀	8, 73
コワリブルー	23	サナ(農具)	61, 69	獅子舞	184, 185, 186, 187 189, 266, 283
婚姻圏	226	サマ(家屋)	53, 306, 307	獅子宿	187
コンゴウ杖	236	ザマ	77	四十九日	216, 234, 237, 239
コンニチ様	214, 219	猿	28	四十九日の餅	34, 65
婚約	227	サルオガセ	130	四十九杯の米	238
		猿田彦(大神)	108, 120, 295	死者の着物	241
さ		猿回し	213, 251	死者の膳	234
西行ぶち	56, 73	三角屋敷	40, 175	地神様	130, 131, 173, 254
さいころばくち	212	三元日	250, 251, 288	シズクソバ	30
催青	75	ザンゲ	167, 168, 171	自然暦	7, 57, 181

クサワケ	114	ケイダレ	257, 343	香典	99, 110, 111, 216, 234, 239
クシ	338	競馬	104	弘法池	137, 296
グシ餅	43		9, 34, 59, 94, 95	弘法池の鯉	296
鯨が鯨に追われる	299	ケイヤク	98, 99, 100, 101 103, 215, 245, 264	弘法井戸	41, 168, 295
クス	28	契約帳	264	弘法様	81
クスガネ	120	ケエカキ棒	252, 255, 256 342, 343	弘法さまと犬	296
クス粉	183	ケエダシ	60	弘法大師	139, 296
くず米	31	ケエド	278, 342	講元(無尽)	114
グズバカキ	59	ケエバ切り	82	高野山	297
くず蘭	80, 90	ケエマワリ	65	交友会	106
クズヤ	47	ケサガケ	219	ゴエイ	45
くだり向き	52, 115	化粧	20	コエオケ	327
区長	3, 97, 98, 99, 100 101, 103, 105, 137, 283	ケズリバナ	256, 316	コエビシヤク	327
区長会	269	下駄	18, 338	五穀	6, 21
区長代理	98, 99, 100	け出し	210	ゴキブリ	134
クツチャゴ	117	月経の忌	129	古行	166, 170, 171, 172
クツキ	226	結婚	12	ゴクサギ	60, 65
口説節	196	結婚衣裳	19	コクソ	76, 79
口費	101	結婚式	36, 226, 330	虚空蔵様	130, 292
熊野神社	127	結婚年令	226	コグチ(戸口)まわり	102, 185
組合製糸	56, 57, 80, 91	月蝕	53	コクヌケ(馬)	82
蔵の神	342	ケデエ	19, 63	木挽	42, 73, 92, 324
倉ピラキ	252, 254	ケヤキ万才	191	こくびつ	54
くり飯	24	献穀田	129	ゴクロウヨビ	12, 238
グルリ十間	48	源太おどり	128, 196	小桑観音	219
クルリ棒	69, 320	源太郎	185, 196, 285	ゴザウチ下駄	338
幕市	90	ケンチン汁	264	コサギリ	103
クロ	318			小作料	55, 61
黒岩歌舞伎	213	こ		コサマメ	68
黒滝山不動寺	170	コアゲ	62, 63, 68, 103, 269	コザル	324
クワイレ	252	鯉のぼり	268	腰籠	37, 297
桑切り鎌	78	(各種)講	107	コジックメ	65, 168, 248 290, 291
クワダテ	13, 130, 243, 254	公会堂	98, 101, 104 105, 136, 218	コジハン	6, 31, 329
桑つみ	76	コウガイ	338	五升マキ(麦)	60
桑苗	77	交際だおれ	226	ゴシ餅	44
桑の害虫	78	江州屋	92	小正月	13, 256, 257, 258, 259
桑の取引	91	庚申講	95, 107, 125	コシトリ(ウラトリ)	76
桑の売買	78	庚申塔	108	コジルシ	123
桑の品種	77	荒神様	7, 52, 81, 262, 291	五寸コウベエ(勾配)	46
桑畑	78	コウズ(カズ)	90, 316	ゴゼ	74, 92, 93, 199, 213, 251
桑原ウナイ	317	上野国神名帳	2	ゴゼの小便	299
桑畑の間作	79	こうせん	33	コセツクリ	120
桑畑の手入れ	78, 181	鉱泉宿	297	小世話	9, 94, 97, 98, 99 100, 103, 104
桑畑の肥料	79	講談	213	ご先祖様	52, 241
群馬県郡村誌	2	コウチ	9, 94, 95, 97 98, 99, 102, 103 104, 109, 111	五臓ザンゲ	170
け		コウデ	175, 177	コダカラ	135
桂庵	70, 77			五駄ジリ	59
稽古宿	186			コタツヤグラ	337



カドサカズキ	229	家例	6, 121, 250, 291	キヌツカアセ	74
門ジメ	126	川うなぎ	89	綱笠様	81, 130
門付け	176	川神様	174	キネ	316
カド火	278, 282	川後石	295	木箱	337
門松	249, 307	カワキツ	64	キバチ	77, 332
カナババ	223	カワソ	72	キビ	6, 23
金火箸	253	川流れ	287	基本財産	98
金物や	92	カワビタリ餅	14, 247, 287	キメゴト	264
蟹沢	297	カワムキガマ	324	キョクザ	7, 51
鉦	342	川原石	238	木遣り	45
金穴	297	棺	235	救荒食料	39
カネバコ	96, 117, 118	寛永寺	2	キュウデ	118, 119, 120
カネマイ(繭)	81	灌溉用水	6	行がため	166, 167
金のわらじ	226	寒かたびら	78	行者	267, 288, 294
歌舞伎	104	棺かつぎ	235	行人	9, 90, 91
歌舞伎芝居	184, 189	カンカン渡し(目方取引)	91	共同飼育	75
かぶりもの	43	寒行	11, 125, 165, 166 171, 172, 173, 296	共同水車	101
壁ぬり	300	冠婚葬祭	309	共同墓苑	102
カマイタチ	300	カンザシ	338	共同墓地	101
釜神様	51, 68, 134, 179 249, 258, 262 287, 290, 291	カンジン	301	行人坂	298
カマクラチャウ	300	ガンズメ	318	行人塚	298
カマド	24, 48, 234 238, 287, 323	関東間	314	興舞	184
かまどの灰	121	カンナ	49	行屋	165, 166, 167, 171, 172
カマドワケ	122	寒念仏	125, 144, 165, 168 170, 171, 172, 173	共有田	101, 131, 140
カマノクチアケ	271, 275	癩の虫	176	共有地	104
髪型	20	観音講	107	共有山	101, 104, 269
カマキリ虫	78	観音信仰	214	共有林	269
神棚	134, 306, 342	カンボウサマ	165, 168, 170 172, 173	協力員	99
雷	181	貫匄摘み	76	虚弱児	12
雷除け	51, 179	カンヤ	6, 47, 309	切りきず	176
上八木時間	114	甘菜社	57, 80	切り格子	314
鴨居	336	き		切妻造	306
家紋	123	キアケヨビ	12, 239	キリボシイモ	27
カヤ(植物)	274	きおん	269	キリヤキ	32
萱刈り	47	着ごぞ	66	禁忌作物	175, 309, 311
カヤク御飯	24	鬼子母神	267	近所づきあい	110
カユカキ樺	65, 260, 261	キジリ	51	巾着はざり	298
カーラック	64	擬制親子	123	く	
ガラ	46	キソッコ(木曾馬)	81	クイ講	10
から臼	33	義太夫	184, 195, 213	クイゾメ	222
カラッケーリ(方言)	300	義太夫チョボ	195	喰違四間取	313
烏鳴き	232	北向観音	219, 225	草刈り	59
烏よけ	179	狐つき	139, 170	クサカリガマ	323
体の弱い子	224	狐の嫁入り	180	草刈り場	74
カラミ餅	290	祈禱念仏	170	草競馬	212
刈り払い	101	木流し	73	クサツケズリ	317
刈り干し	67			草餅	266, 267
				クサレイモ	284
				クサレ彼岸	266

オシガ様	295	オハツウ	292	書き初め	251, 259
お七夜	221	オバンシ	24	かくねっこ	210
オシマンガ	318	おひーと	221	神楽	185, 189, 195 251, 266, 283
押麦	22, 41	おひねり	221	神楽獅子	184, 188, 213
オシメ	18, 270	お日待	130	神楽使い	188
オジヤ	24, 107	オビヤ	112	神楽舞	186, 189
オシヤカ様	266	お百度詣り	233	カゲシヨ	29
お十夜	14, 98, 196, 285	オボスナ様	222	陰翳	38, 88
お精進	9, 95, 105	オボタテメシ	219, 221	カケトリ	90
お精進場	294	オボヤキ	222	カケナワ	283
オシラ様	13, 130, 245, 263	オマイダマ	129, 130, 131, 233	カゲの俵	26
オシリヨウ様	10, 11, 125 133, 134, 247	お待女房	215, 228, 230 231, 309	駕籠	89
オゼンダテ	222	オマル	107	カゴ飼い	76, 77
オタカネ様	128	オミタマ様	14, 248, 260, 292	カゴタ	64
オタキアゲ	248	オミトウ	57, 129, 247, 287	風穴	75
オタケ山	289	お宮詣り	215, 222	カザテ	57
オタナアゲ	240	オムネアゲ	133	飾りカエ	258
お働きがし	251, 292	オヤコ	96, 117	飾り菓子	257
オダンス(米)	36, 68, 233 239, 245	親子盃	229	貸売り	92
オチカツキ	231	親子の縁	240	カシグネ	183
オチツキ	228	オライレン様	138	カシ餅	244, 258
お茶	39	オルスイ様	277, 283	鍛冶屋	92
お茶呼び	112, 116, 231	オロシ(家屋)	306	伽藍山	130
オッチャンコウベエ (屋根勾配)	46	オンガ	318	カシワツバ餅	268
オツツグ(筒粥)	129	御嶽講	130	カズ(楮)	8, 256, 257
オツラ	329	女契約	10	カズオケ	167
オダキ	176	女と馬の年取り	248, 289	カズガラ	316, 343
オテッコモチ	38	女中人	309	カズミズ (寒行)	166, 167, 168 170, 171
おでし(弟子)	166, 167, 170 172, 173	女の節供	265	カズヤ	85, 316
お手玉唄	200	女の年取り	14, 35, 289, 292	風	181
お天道様	286, 291	オンバコ	177	風きり	283
オテンマ	9, 46, 99, 102 116, 213, 269	か		カゼ(風邪)	176
オテンマイエ	306	カイコカゴ	188, 327	風邪の神	176
お灯明板	128	蚕神	13, 129, 130, 245	家相略図	308
男仲人	309	蚕の病氣	76	家族間務呼	116, 302
男の節句	267	蚕の休み	76	家族の私財	10, 118
男の年取り	292	蚕日備	77	片落し	69
オトリモチ	230	蚕餅	81, 268	カタクチ	329
鬼ごっこ	210	蚕和讃	169	片見月	283, 284
鬼の首	261	カイド	246		13, 129, 244
鬼の豆	263	置物	90	カタナ	252, 256, 257 259, 342
オネ(地形)	300	家屋守護札	314	かたみわけ	239, 240
オハカコシラエ	271	カアカザシキ	7, 51	片目のどじょう	296
おはじき	211	カカシ	14, 65, 175	家長	95, 115
小幡領	2, 3	カカリット	117, 119	滑車	329
オハチ返し	238	柿	28, 29	カッチキ	59, 79
		カギ(鉤竹)	52, 179, 262, 263 330, 337, 338	カツドオシ釘	6, 46
				河童	289

犬の字 .....221  
 犬の肉 .....28  
 戌の日 .....69, 133, 288  
 稲刈り .....67, 129  
 稲こき .....67  
 イノゴ .....178  
 猪土手 .....114  
 折りくぎ .....138  
 位牌 .....116, 235  
 位牌わけ .....240  
 イボ .....179  
 イマ(居間) .....49  
 イミアケ .....240  
 芋 .....24, 26, 36, 37  
 芋洗い白 .....27  
 芋がら .....286  
 イモグシ .....27  
 イモ車 .....27  
 イモダンゴ .....35, 284  
 イモの食い初め .....35  
 イモの鉢巻 .....6, 30  
     7, 10, 24, 48, 50, 51, 95  
 イロリ .....115, 130, 134, 167, 168  
     171, 179, 222, 234, 243  
     244, 258, 262, 263  
 いわし雲 .....181  
 岩鼻県 .....2, 3  
 隠居 .....116, 166, 167  
 隠居免 .....116, 119  
 インドウバ .....236  
 インロウ .....337  
  
 う  
 うけとり渡し .....62  
 うさぎ .....85  
 うさぎめし .....24  
 牛 .....84  
 牛神様 .....222, 228  
 氏子総代 .....126, 186, 283  
 丑の刻参り .....138  
 ウス .....342  
 白の彫り方 .....73  
 碓氷社 .....57  
 ウスハナ .....19  
 ウチウマヤ .....48  
 うちぐるみ .....178  
 ウチジュウ .....234, 238  
 家中呼び .....111, 112, 122  
 ウドンの荷縄 .....281  
 ウナイガケ .....317

卯の日 .....110, 248  
 産着 .....222, 223  
 ウブタテゴハン .....214  
 産湯 .....221  
 馬入れ道 .....89  
 馬神様 .....48  
 馬捨場 .....83, 141  
 馬とお産 .....225  
 馬の年取り .....14, 35, 289, 292  
 馬の鼻どり .....175  
 午の日 .....247, 288  
 馬の病気 .....82  
 馬の糞 .....241  
 馬のわらじ .....83  
 馬屋 .....83, 306, 310  
 馬屋肥 .....83, 84  
 生れかわり .....138  
 裏ハッカケ .....20  
 ウリ天王様 .....136  
 ウルシ .....221  
 うるしかふれ .....176, 178  
 運送ひき .....85, 88  
  
 え  
 衛生委員 .....100  
 エエ .....6, 7, 41, 46, 47, 62, 74  
     85, 112, 113, 269  
 疫病神 .....253  
 影向岩 .....10  
 エダ塔婆 .....125, 240, 288  
 越後口説き .....185, 199  
 越後ダボ .....70  
 エチゼンガマ .....323  
 越中さん .....55, 62, 70  
 えびす講 .....134, 135, 256  
     261, 286  
 エビス様 .....135, 248  
 恵比須・大黒 .....53  
     83, 127, 141  
     265, 317, 342  
 絵馬 .....83, 127, 141  
     265, 317, 342  
 エンガ .....65, 317, 342  
  
 お  
 オイベスコウ .....27  
 大カゴ .....327  
 大阪錠 .....49  
 オオサキ .....108, 139, 180  
 大正月 .....257  
     9, 14, 94, 97, 98  
 大世話 .....99, 100, 101, 104  
     105, 113, 187

大世話人 .....270, 285  
 大掃除 .....290  
 大当番 .....67, 94, 98, 100, 105  
 オオドシ .....250, 292  
 オオナオシ .....48  
 大畝(おおび) .....271  
 大火(おおび) .....137  
 オヒキベツトウ .....28  
 大晦日 .....248, 291  
 大妻 .....68  
 オカオカクシ .....233  
 尾頭つき .....53, 132, 133  
     252, 253, 289  
     10, 96, 115  
     116, 118, 283  
 オカタ .....10, 96, 115  
     116, 118, 283  
 オカボ .....22, 68  
 オカヤキ .....32  
     8, 47, 72, 215, 228  
 オガラ .....229, 234, 236, 246  
     274, 275, 276, 280  
 オカリヤ .....88, 107, 120, 123  
     132, 133, 288  
 オガンショバタシ .....140, 218  
 置き薬 .....92  
 お菊一代記 .....196  
 お菊伝説 .....293  
 オキヨメ .....236  
 オキリコミ .....6, 17, 26, 28  
     29, 30, 38  
 オクデ .....309  
 オクラビラキ .....130  
 送り一見 .....228  
 オクリ念仏 .....106, 236  
 送り火 .....247, 274, 281  
 送り盆 .....277, 282  
 オクリノデエ .....313  
 オコウジンサマ .....343  
 オコシ .....143, 217  
 オコジョハン .....27, 38, 42, 66  
 オコモリ .....109, 128, 269, 284  
 お衣こころ .....170  
 オコンジョウ神様 .....254  
 オサガリ .....254  
     131, 132, 144, 171  
 オサゴ .....172, 221, 243, 252  
     253, 267  
 幼な子和讃 .....169  
 お産 .....217, 218, 219  
     220, 221, 309  
 お産祝 .....221  
 オシイ .....107, 108  
 オシウチ竹 .....6, 46, 47, 324

# 索引

<p><b>あ</b></p> <p>アイダワ(桑).....58</p> <p>挨拶言葉.....113, 301</p> <p>青大将.....182</p> <p>赤いオンベロ.....224</p> <p>赤いシメ.....288</p> <p>アカギレ.....176, 178</p> <p>アカダキ.....112</p> <p>赤坊のお茶よび.....222</p> <p>(収穫)アガリ.....108</p> <p>秋あげ.....232, 286, 329</p> <p>秋葉神社.....128</p> <p>秋祭り.....284</p> <p>悪魔払い.....97, 187, 188, 260</p> <p>(麦)アゲ作.....56</p> <p>アゲダメ.....49</p> <p>麻.....21, 55, 61, 71, 316, 318</p> <p>朝エビス.....261</p> <p>麻がら.....88</p> <p>麻切り鎌.....72, 316, 324</p> <p>麻商人.....8</p> <p>アサツクリ.....323</p> <p>麻の織物.....72</p> <p>麻の葉.....223</p> <p>麻の実.....28</p> <p>麻ヒキフネ.....72</p> <p>麻まき桜.....174</p> <p>アサマツ.....181</p> <p>朝湯.....249</p> <p>アサンメエ.....82</p> <p>アンナカ.....18</p> <p>小豆.....68</p> <p>小豆粥.....48, 108, 253 257, 260, 261</p> <p>小豆ぼうとう.....29</p> <p>小豆飯.....34, 262</p> <p>アズキモノ.....287</p> <p>あせも.....176</p> <p>遊びじまい.....261, 262, 267</p> <p>愛宕精進.....262</p> <p>厚餅い.....75</p> <p>吾妻屋神社.....126, 128, 137 240, 269, 284</p> <p>後産.....12, 214, 220</p> <p>アトマル(下駄).....338</p>	<p>アナバ(穴掘り).....9, 98, 100, 106 111, 234, 235 236, 239</p> <p>アナブサギ.....285</p> <p>あねさんかぶり.....78</p> <p>油売り.....92</p> <p>油ダクネン.....301</p> <p>油徳利.....331</p> <p>阿夫利神社.....128, 137, 270</p> <p>雨乞い.....7, 63, 103, 129, 137</p> <p>阿弥陀堂.....295</p> <p>阿弥陀如来.....166, 167, 168</p> <p>雨降り田.....64</p> <p>雨つぶり祝い.....103</p> <p>あめや.....91</p> <p>洗い米.....281</p> <p>アラクレ.....318</p> <p>アラコナシ.....318</p> <p>荒船山.....63, 129, 137</p> <p>新盆.....276</p> <p>新盆見舞.....110, 271, 279, 280</p> <p>アワ.....23, 68</p> <p>栗穂・神穂.....243, 255</p> <p>アンカ.....337</p> <p>安産折願.....217</p> <p>安産信仰.....11, 140, 214</p> <p>アンドン.....336</p> <p style="text-align: center;"><b>い</b></p> <p>イイツギ.....105, 233, 234, 235</p> <p>家こわし.....112, 113</p> <p>家印.....123</p> <p>いかげや.....92</p> <p>イキダシ.....311, 312</p> <p>イキヌキ.....48, 310, 313</p> <p>いげ茶.....238</p> <p>イザリ機.....72, 337</p> <p>石臼(手臼).....31, 33, 233 256, 290</p> <p>石置き屋根.....46, 324</p> <p>石かつぎ.....226</p> <p>イシヅチナタ.....324</p> <p>イシマナゴ.....57</p> <p>96, 120, 122, 123, 130</p> <p>石宮.....131, 132, 142, 254, 255 265, 287, 329</p> <p>イシヤゴロシ.....176</p> <p>イシヤネ.....6, 309, 210, 313, 314</p>	<p>伊勢講.....107</p> <p>伊勢参宮.....88, 112</p> <p>伊勢参り.....130</p> <p>居候.....117, 299</p> <p>イタゲエシ.....47</p> <p>イタハギ職人.....47</p> <p>板張床.....308, 310</p> <p>イタブキヤネ.....306</p> <p>イタメ(板目).....46</p> <p>板屋根.....6, 17, 37, 46, 47 309, 311, 313, 316</p> <p>板割り.....46, 132</p> <p>板割職人.....17, 324</p> <p>イタワリナタ.....316, 324</p> <p>一見座敷.....228, 231</p> <p>一合マス.....340</p> <p>一合餅.....104</p> <p>一山和尚.....294</p> <p>一升徳利.....331</p> <p>一升餅.....109, 223</p> <p>一食の基準.....38</p> <p>一駄マキ.....59</p> <p>イチドナリ.....99</p> <p>一人前.....118</p> <p>一人前の仕事量.....63, 182</p> <p>一番オコシ.....318</p> <p>一バンコ.....57</p> <p>一番ドオシ.....57</p> <p>市日.....90</p> <p>イチマケ.....96, 122</p> <p>一夜餅.....290</p> <p>一把線香.....178</p> <p>イッケ.....96, 122</p> <p>6, 41, 177</p> <p>井戸(神).....178, 262, 342</p> <p>イドコ.....308</p> <p>いとこ同忌.....226</p> <p>井戸の禁忌.....41</p> <p>糸ひき車.....73</p> <p>イトヒキナベ.....327</p> <p>稲倉神社.....245</p> <p>稲倉山.....129, 130, 268</p> <p>稲荷様.....41, 81, 120, 132 133, 287, 288</p> <p>稲荷大明神.....264</p> <p>イヌくわず.....68</p> <p>イヌ念仏.....142</p>
--	--	--

群馬県民俗調査報告書第二十五集

妙義町の民俗

昭和五十八年三月二十八日印刷  
昭和五十八年三月三十日発行  
(非売品)

編集発行

群馬県教育委員会

前橋市大手町二丁目一番二号

電話 〇三三〇一一一

印刷所

朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町六七番地

電話 〇三三〇一一二